

令和4年度

研究活動報告



桜美林大学 老年学総合研究所

はじめに

皆様におかれましては時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。

ここに2022（令和4）年度の老年学総合研究所活動報告書を、お届けできますことを嬉しく思います。

老年学総合研究所は、超高齢社会を迎えた我が国において、より明確に「老年学」という、高齢者を取り巻く広範な課題に適切に対処できる研究機関であるとともに、広く社会一般の方々に「老年学」の重要性とさまざまな課題について、総合的な情報発信の中核的機関として、知っていただくことを目標に掲げております。現在、研究所の陣容としては研究員6名（本学の大学院老年学学位プログラムの教員をかねております）、および連携研究員33名を擁する老年学の総合的な研究所といえる構成となっております。本研究所は、研究活動は勿論のこと、修士課程、博士課程に在籍する本学の大学院生に対して老年学のさまざまな課題に関する実習の場としても利用されております。

令和4年度も、新型コロナウイルスの感染が第7波、第8波と収まらず、質問紙調査やインタビュー調査の実施には困難な状況が続いた時期でした。その一方で、そういったデータの収集に、アンケート調査用アプリやZoomなどを活用した新しい試みが行われ、今後の調査研究における新たな手法の可能性を見出すことができたように思えます。高齢者や高齢者を取り巻く状況に対して、新型コロナウイルスの感染が及ぼす様々な影響を明らかにする調査研究も進められており、今後新たな知見が生み出されることが期待できます。

今年度も、研究所研究員および連携研究員の皆様のご努力の成果がこの活動報告書に結実しております。また、本報告書の作成・刊行にあたっては、桜美林大学総合研究機構並びに老年学総合研究所の事務担当のご尽力もいただき、ここに厚くお礼を申し上げます。

今後も桜美林大学老年学総合研究所に対する温かいご理解とご支援、そして厳しいご指導を賜りますようお願い申し上げます。

2023年3月

桜美林大学 老年学総合研究所

所 長 中 谷 陽 明

令和4年度 研究活動報告

研究員（常勤）研究活動報告

1)	中谷 陽明	1
2)	長田 久雄	3
3)	杉澤 秀博	4
4)	鈴木 隆雄	8
5)	新野 直明	16
6)	渡辺修一郎	18

連携研究員研究活動報告

1)	青木 宏心	23
2)	浅野 文孝	26
3)	有田 昌代	27
4)	池田 晋平	29
5)	植田 大雅	31
6)	遠田 恵子	32
7)	押切 康子	35
8)	小野寺典子	36
9)	葛 輝子	37
10)	小林由美子	39
11)	佐々木華香	41
12)	柴崎 雄悟	43
13)	鈴木 香	44
14)	鈴木 知明	45

15)	関野 明子	46
16)	孫 潔	47
17)	徳田 直子	52
18)	殿原 慶三	53
19)	友永 美帆	54
20)	萩原真由美	55
21)	橋本由美子	57
22)	平林 規好	59
23)	藤井 顕	60
24)	ブラン野口純代	61
25)	堀内 裕子	63
26)	牧野公美子	65
27)	松井 康祐	67
28)	山岡 郁子	68
29)	吉田 綾子	69
30)	楽 冠好	71

1. 研究課題

- (1) 地域共生社会実現のためのソーシャルワーカーの有用性の研究
- (2) 高齢期における自殺対策へのアドバイジング

2. 研究活動の概要

(1) 地域共生社会実現のための社会福祉士の有用性の研究

地域共生社会の実現を目指した試験的事業が全国において展開されているが、そのような試験的事業におけるソーシャルワーカー（社会福祉士・精神保健福祉士）の有用性を検討する調査を実施し、そのエビデンスの提示を目的とした。これにより、ソーシャルワーカーの専門性を示すエビデンスの一端が見出されることが期待できる。今年度は、2020年度にモデル事業を実施した自治体、および2021年度に重層的支援体制整備事業あるいは移行準備事業を実施している自治体とした。総計では、122の自治体に調査を依頼した。

今回の調査においては、質問紙への回答を、WEB上で回答することが可能なGoogle Formを利用して行った。調査の対象となった122の自治体に依頼文書を送付し、文書にはGoogle Formへのアクセスの仕方およびURL、QRコードを掲載した。質問紙への回答は、上記に示したように、相談支援包括化推進員あるいはそれに準じる職員にお願いした。さらに、今回の対象とした各事業は、自治体が直接実施しているだけでなく、社会福祉協議会等の民間の団体や組織に委託して実施しているところも少なくないことから、調査の依頼文書を、そういった委託先に転送してもらうこともお願いした。

質問紙には、下記のような質問項目を設定した。

1. ソーシャルワーカーとしての専門性を明らかにする業務の項目

相談支援包括化推進員が携わる相談支援業務の中でも、ソーシャルワーカーの専門性を明らかにするのに有効な項目を設定した。既に昨年度の聞き取り調査および情報収集から作成した32項目をもとにして、質問紙への回答のしやすさ等を勘案し、11項目を削除し、以下の21項目を設定した。

2. コロナ禍による影響についての項目

コロナウイルス感染の状況が、重層的支援体制整備事業に何らかの影響を与えているのではないかという観点から、以下の2つの質問を設定した。

今回の調査においては、地域共生社会の実現を目指した重層的支援体制整備事業におけるソーシャルワーカーの有用性を示すことはできなかったことから、今回の調査で設定したソーシャルワーカーの有用性を示すと思われた相談支援業務の項目では、社会福祉士の資格を保有していることが、重層的支援体制整備事業における業務の実施度および業務の優先度を促進するという仮説を証明することができなかった。重層的支援体制が本格的に実施されていく中で、再度調査実施の機会を捉え、今後あらためて調査項目を精査し、重層的支援体制の実施におけるソーシャルワーカーの有用性を考え直す必要がある。

(2) 高齢期における自殺対策へのアドバイジング

愛媛県松前町自殺対策推進委員会委員長として、松前町役場関係機関と合同で、松前町自殺対策推進計画の立案と推進におけるアドバイジングを行った。町関係者への「高齢期における自殺の特徴とその支援」と題した講演を行い、町役場内の啓発を試みた。さらに意識調査の企画と実施への助言等を行った。

3. 研究業績

【調査報告書】

ソーシャルケアサービス研究協議会『福祉三専門職によるソーシャルワークの有効性に関する研究』（令和3年度社会福祉振興・試験センター研究助成事業報告書）

【その他】

エッセイ『コロナ感染と介護事業破綻』ジェロントロジー通信, No.39, 2023.

1. 研究課題

高齢者の心理的適応に関する研究

2. 研究活動の概要

昨年度に引き続き、加齢性難聴への対応、認知症高齢者と家族への地域支援の研究に加え、宗教者の死の看取りに関する研究を行った。

3. 研究業績

【論文】

- 1) Sumiyo Brenna, Therese Doan, Hisao Osada, Yumiko Hashimoto. Validation of the Japanese version of the quality of life-Alzheimer' s disease for nursing homes. Aging & Mental Health. 2022.5.18
- 2) 加藤佐千子・長田久雄、80歳以上独居女性高齢者における食物活動に対する認識、日本食生活学会誌、第33巻1号、5-18、2022.

1. 研究課題

- (1) 高齢者の健康格差に関する研究
- (2) 年齢・性・社会階層による重層的差別の影響と差別の関連要因に関する研究
- (3) 高齢者の就業推進に関する研究
- (4) 慢性疾患患者の療養生活の安定に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者の健康格差に関する研究

本研究では、要介護でかつ経済的に困難を抱えた高齢者に対する介護支援専門員の介護サービス調整が地域レベルの社会階層によって影響を受けるか否か、さらに影響を受ける場合にはその媒介要因を分析することを目的とした。地域レベルの社会階層の測定は、自治体と介護支援専門員の担当地区という2つのレベルで行った。自治体レベルでみた経済階層が高い人が多く居住する地域、経済階層が低い人が多く居住する地域それぞれ、162人と235人の介護支援専門員が分析対象であった。媒介要因は、担当ケース数、担当ケース中の対応困難とみられる事例の種類、経済的に困難な事例の担当数、担当した経済的に困難な事例中の複合的な困難の種類数であった。介護サービスの調整に関する評価は介護支援専門員による自己評価であり、経済的に困難を抱えた事例対応の困難感と経済的に困難な事例の予後に対する評価の2側面から行った。分析の結果、介護支援専門員の担当地区のレベルで経済的に良好か否かによってサービス調整に関する2つの評価指標に有意差が見られること、さらにその差は担当ケース数と経済的に困難な事例中の複合的な困難の種類数によって媒介されることが明らかにされた。本研究の成果は欧文誌に投稿中である。本研究は、科学研究費助成事業「高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明」（研究代表者：杉澤秀博）の助成を受けて行った。共同研究者は、柳沢志津子氏（徳島大学）、北島洋美氏（日本体育大学）である。

(2) 年齢・性・社会階層による重層的差別の影響と差別の関連要因に関する研究

年齢差別とは、年齢に基づき不平等・不利な扱いを受けることを意味する。その解消を目指して、欧米では、1) 年齢差別の影響、2) 年齢差別の背景・要因に関する研究が進められている。最近の中心的論点は、1) については「年齢差別の経験が若年から高齢に至る幅広い年齢の間でどの年齢層に多いのか?」「年齢差別の経験が健康やウェルビーイングに与える影響とそのメカニズムは何か?」「年齢差別の経験が性、社会階層など他の差別経験と重層化した場合、その影響は増幅されるのか?」、2) については、「なぜ年齢差別をするのか、そのメカニズムは何か?」「年齢差別をする人は性・社会階層によって差別をする人と共通しているのか?」である。しかし、各論点に対する実証的な回答を得るための研究は、日本ではほとんどなく、欧米でも不十分である。日本人の国民性として、集団主義的な傾向が強く、さらに東南アジアの儒教の影響もあり、年齢差別、特に高齢者に対する差別が弱い、あるいは影響や背景要因も異なるのではないかとの指摘がある。この指摘の妥当性を含め、年齢差別に関する理論の検証と結果の一般化を図るため、日本を対象とした研究が必要である。以上のような問題意識に基づき、本研究では、1) 年齢差別の影響については、(1) 年齢差別の経験が高齢者に特有なのか、(2) 年齢差別の経験が健康・ウェルビーイングに与える影響とその心理社会的メカニズムは何か、それは年齢によって異なるのか、(3) 年齢と他の差別(性、社会階層)との重層化は年齢階級別にみて特徴があるのか、年齢と他の差別経験との重層化によって健康・ウェルビーイングへの影響が増幅されるのか、それらは年齢によって異なるか、という課題を解明することを、目的とした。2) 年齢差別の要因・背景については、(1) その心理社会的メカニズムは何か、そのメカニズムは年齢によって違いがあるのか、(2) 年齢差別と性、社会階層による差別の要因は共通するの否か、という課題を解明することを目的とした。今年度は、すでに年齢階級別(20~79歳まで10歳間隔で6階級)・性別に各200人計2,400人のデータをウェブ調査で収集しており、そのデータを利用して上記の分析課題に基づき分析を進めている。以上の研究は、学内学術研究振興費の助成を受けて行った。

(3) 高齢者の就業推進に関する研究

近年60歳以上の年齢層の就労率が高まっている。その背景には高齢者の雇用保障政策の強化があるとされている。しかし、雇用保障政策は年金支給開始年齢の引き上げと連動していることから、就労意欲がないにも関わらず就業する人の割合が増加し、その結果として高齢者の職業満足度が低下している可能性がある。本研究では、60~64歳の男性を対象に、1999年(65歳までの雇用保障の義務化前)と2016年(義務化後)における職業満足度の雇用形態による格差とその要因を解明した。分析データは55~64歳男性の全国標本(4,000人と2,000人)を対象にそれぞれ1999年と2016年に実施した調査で収集されたものであり、回答者中60~64歳の就業者(1999年772人、2016年399人)を対象に分析した。従属変数に職業満足度、独立変数に雇用形態(「正規」「非正規」「自営」)、さらに、雇用形態の職業満足度に影響する媒介要因として職業性ストレス理論に基づき「自由裁量のなさ」「仕事要求度」「技術未活用」「雇用不安

定」を設定した。分析の結果、雇用形態による格差が存在しており、「正規」の就業者と比較して「非正規」の就業者の職業満足度が2016年でのみ有意に低かった。さらに2016年において「非正規」の就業者で「正規」の就業者と比較して職業満足度が有意に低かったのは、「自由裁量のなさ」が媒介していた。本研究の成果は欧文誌に投稿予定である。本研究は、科学研究費助成事業「高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明」（研究代表者：杉澤秀博）の助成を受けて行った。共同研究者は、原田謙氏（実践女子大学）、杉原陽子氏（東京都立大学）、柳沢志津子氏（徳島大学）、新名正弥氏（田園調布学園大学）である。

（4）慢性疾患患者の療養生活の安定に関する研究

糖尿病、悪性腫瘍などの慢性疾患に罹患した患者が偏見や差別といったスティグマを経験すること、さらにその経験が健康と生活に悪影響をもたらすことが欧米だけでなく日本においても明らかにされてきている。近年、透析開始の原因として、糖尿病による腎症の割合が新規透析患者の半数以上を占めるようになった。この糖尿病については、前述のようにスティグマを経験する人が多い。さらに、透析に伴う高額の医療費のほとんどが公的に賄われていることから、その社会的負担のあり方をめぐる議論もみられる。このように透析に関する医学的・社会的な状況を考えると、透析患者が透析に伴うスティグマを経験し、その経験が健康、社会生活に悪影響をもたらしている可能性があるものの、透析患者を対象としたスティグマに関する研究は、筆者がレビューした限りない。本研究では、2021年に日本透析医会の会員施設に通院する透析患者を対象とした調査のデータを活用し、透析患者が経験するスティグマとその健康・生活影響に関する課題を解明した。分析の結果、透析に関連したスティグマを経験している患者が20%程度いること、さらに、その経験がうつ症状の増悪、食事療法へのコンプライアンスの低下、インフォーマルなネットワークの縮小に関連していること、さらに、透析に関連したスティグマと就学年数、性、透析開始の原因としての糖尿病といった既存のスティグマの対象となる特性との間に有意な交互作用が存在することも明らかにされた。以上の研究成果は、現在、欧文誌に投稿中である。

本研究は、透析医療研究会（研究代表者：杉澤秀博）の研究の一環として、清水由美子氏（東京慈恵会医科大学）、熊谷たまき氏（国際医療福祉大学）、宍戸寛治氏（日本透析医会）、甲田豊氏（日本透析医会）、篠田俊雄氏（日本透析医会）と共同で行っている。

3. 研究業績

【論文】

1) 査読付き

(1) [Sugisawa, H.](#), Shimizu, Y., Kumagai, T., Shinoda, T., Shishido, K., & Koda, Y. 2022. Discordance between hemodialysis patients' reports and their physicians' estimates of adherence to dietary restrictions in Japan. *Therapeutic Apheresis and Dialysis*, 26(6), 1156-1165.

(2) Sugisawa, H., Shimizu, Y., Kumagai, T., Shishido, K., & Shinoda, T. 2022. Influences of financial strains over the life course before initiating hemodialysis on health outcomes among older Japanese patients: A retrospective study in Japan. *International Journal of Nephrology and Renovascular Disease*, 15, 1-13.

(3) Harada, K., Sugisawa, H., Sugihara, Y., Yanagisawa, S., & Shimmei, M. 2022. Big five personality traits, social networks, and depression among older adults in Japan: A multiple mediation analysis. *The International Journal of Aging and Human Development*, 00914150221109893.

(4) 劉琳, 杉澤秀博. 2023. 中高年者の疲労感に対する孫の世話の影響 —中国浙江省江山市の1地区に居住する中高年者を対象として. *老年学雑誌*, 13. (印刷中)

(5) 小野寺典子, 杉澤秀博. 2023. 国／地域のジェンダー平等度と高齢有配偶男性の家事参加 —世界規模の調査データの分析から—. *老年学雑誌*, 13. (印刷中)

(6) 柳沢志津子, 高橋舞, 杉澤秀博. 2023. 「通いの場」を利用する高齢者のソーシャル・キャピタルが主観的ウェルビーイングに及ぼす影響. *老年学雑誌*, 13. (印刷中)

(7) 孫潔, 杉澤秀博. 2022. 高齢者における主観的な学習ニーズと実践に関する研究：関連要因の解明. *応用老年学*, 16 (1), 10-22.

(8) 北島洋美, 杉澤秀博. 2022. 性的マイノリティ (LGB) 高齢者の主観的生活課題. *老年社会科学*, 44 (3), 242-255.

2) 査読なし

(1) 杉澤秀博. 2022. 高齢者の職業生活の20年間の変化：高齢者の雇用延長政策による影響はあるのか? *中央調査報*, 782, 6857-6861.

【学会発表・座長】 (筆頭著者のみ)

(1) 杉澤秀博, 基調講演：集学的老年学と学際的老年学. 日本老年社会学会第64回大会. 東京. 2022. 7.2-3.

(2) 杉澤秀博, 大会企画講演(健康科学と社会科学の融合)の座長. 日本老年社会学会第64回大会. 東京. 2022. 7.2-3.

(3) 杉澤秀博, 原田謙, 杉原陽子, 柳沢志津子, 新名正弥. 中高年による職場における年齢差別の評価に影響するミクロ・メゾ・マクロ要因. 日本老年社会学会第64回大会. 東京. 2022. 7.2-3.

【科研費などの助成金】

(1) 科研費 (基盤(A)). 高齢者における社会的不利の重層化の機序とその制御要因の解明 (研究代表者).

(2) 学内学術研究振興費. (研究代表者). 年齢・性・社会階層による重層的差別の影響と差別の関連要因：差別する側と差別される側の両側面に着目して

1. 研究課題

地域在宅高齢者における高次生活機能の評価に与える要因について —ILSA-JにおけるJST版活動能力指標の分析から—

2. 研究活動の概要

1) はじめに

2022年の日本人の平均寿命は男81.47歳、女87.57歳でいずれも世界で最も長い集団となっている。このような日本人における長寿化の要因は経済的要因や文化的要因あるいは栄養学的な要因など数多くあり、それらが複雑に関わって今日の状況を生み出している。平均寿命の増加に伴って高齢者の健康度、すなわち身体機能の向上に伴う生活機能の著しい改善をもたらされたことは明白である¹⁾。このような長寿化と生活機能の向上は、社会における高齢者の存在意義すなわち高齢者か過去のような単なる社会的負担を有する弱者としての存在なのか、あるいは社会への貢献性と生産性を持つ有効な資源としての存在なのかを見極めるうえで重要な手がかりを示している。

高齢者が日常生活を送るうえで必要な様々な身体機能、精神機能、社会的機能の総体を「生活機能」(Functional Capacity)と呼ぶ。Lawton (1972)²⁾は生活機能を7つの水準に体系化している。すなわち、1「生命維持」に始まり、2「機能的健康度」、3「知覚—認知」、4「身体的自立」、5「手段的自立」、6「状況対応」、そしてその頂点として7「社会的役割」に至るヒエラルヒー・モデルを提唱したのである。本研究で取り扱う「日常生活活動能力」(Activity of Daily Living: ADL)はLawtonのいう「身体的自立」の水準よりもさらに高度な第5段階から第7段階の生活機能であり、これを総称して「高次生活機能」と呼んでいる³⁾。日本では高齢社会の進行した1980年代後半から1990年代前半に開発された「老研式活動能力指標」(TMIG-IC)³⁾によって測定可能となり、これまで国内外の多くの研究で用いられてきた経緯がある。しかし、2000年代に入り、日本は超高齢社会となるとともに生活環境や社会環境の著しい変容に伴い、高齢者の健康度の上昇および生活機能の向上に伴い、2015年以降は新たな高齢者の高次生活機能測定指標として「JST版活動能力指標」(JST-IC)が開発され、現在広く用いられるようになってきた。JST-ICに関する測定対象概念の確定⁴⁾、因子構造の検討および交差妥当性の検証⁵⁾、測定不変性(measurement invariance)⁶⁾など生活機能測定指標としての基本的な検証はすでに報告されている。

一方、現在わが国では数多くの地域在宅高齢者を対象としたコホート研究が実施されている。それらの中で、比較的規模が大きく、標準的な測定指標を活用し、すでに数多くの論文発表をはじめとする成果が示されている良質なコホート研究を統合し、メタアナリシス等の統計学的手法により日本人高齢者の老化と健康水準の変動を明らかにする研究、すなわち国立長寿医療研究センターによる「日本人の老化に関する統合的研究: ILSA-J」が進行中である。本研究では、高齢者の高次生活機能の評価としてJST-ICが用いられており、2017年±2年をBase-lineとしてデータが収集されている。ILSA-Jに関する詳細な対象コホートや各コホートにおける対象者、収集方法や分析方法さらに手段的ADLやフレイルの頻度、認知機能の状況などに関してはすでに多くの報告がなされている⁷⁻⁹⁾。

本研究では、ILSA-Jにおいて2017±2年におけるBase-line時の15コホート（対象者22,322名）のJST-ICのプールされたデータについて性別、年齢階級別の平均値±標準偏差を算出した。プールされたデータのメタアナリシスでは往々にして異質性（Heterogeneity）が問題となるが¹⁰⁾、本研究においても異質性が検出され、特に調査方法（健診方式によるデータ収集vs質問紙留め置き調査によるデータ収集）による差異が大きな影響を及ぼしていたと推定されたため、データ・セレクション・バイアスの視点から追加的な分析を試みたので報告する。

2) 研究方法

本研究は上述のように、ILSA-Jにおいて2017±2年のBase-line時に収集された15コホートの高齢者の高次生活機能の指標、すなわちJST-ICを用いた

現在の日本人高齢者における性・年齢階級別の平均値および標準偏差を提示するとともに、調査方法の異なりによる異質性についての分析的研究を行った。

① Integrated Longitudinal Study on Aging: ILSA-J

国立長寿医療研究センターでは2017年に日本で：実施されている地域在宅高齢者を対象として、比較的規模の大きい13の前向きコホート研究のデータを収集してMeta-analysisを実施し、日本人高齢者の平均的な老化の動向を明らかにする総合的な研究をILSA-Jとして開始した。ILSA-Jへの参加の条件は、1) 日本国内で実施されていること、2) 65歳以上の地域住民を対象としていること、3) 特定疾患ではなく、老化に関する観察型研究であること、4) 標準的な測定方法（変数）を用いていること、5) すでに研究紹介の論文が公開されていること、などである。すでにILSA-Jの成果として、1) 高齢者の生活機能の根幹をなす身長、体重、BMI、通常歩行速度、握力およびI-ADLの6項目に関する経年的変化⁸⁾、2) 日本版CHS基準（J-CHS 文献）を用いたフレイルの経年的変化⁹⁾、およびMMSEの得点データを用いた認知機能の経年的変化¹⁰⁾などが報告されている。本研究で高齢者の高次生活機能を測定するJST-ICについてはILSA-Jにおいても2017±2年でデータ収集がなされている。

② Japan Science and Technology Agency Index (JST-IC)

日本では、高齢者の高次生活機能は1986年に開発された老研式活動能力指標（Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology Index of Competence: TMIG-IC）が用いられてきたが、近年の情報・通信分野における著しい社会的変容に伴い新たな高齢者の活動能力指標

の開発が求められ、2017年にJSTよりJST版活動能力指標利用マニュアルが公表され現在最もよく利用されている¹²⁾。

JST-IC は表に示されるように、1)「新機器利用」、2)「情報収集」、3)「生活マネジメント」、4)「社会参加」の4つの下位尺度に4項目ずつ、計16項目から構成されている。各項目について、「はい」もしくは「いいえ」で回答を求め、「はい」に対して1点を、「いいえ」に対しては0点を与え、合計点は16点となっている。筆者らはこれまで、JST-ICに関する測定対象概念の整理作業と候補項目の作成について、都市部に居住する高齢男女に郵送調査を実施して分析⁵⁾、および全国に居住する高齢男女(65~84歳)を対象とした留め置き調査による、項目分析、最終項目の選定、因子構造の検討、併存妥当性の検証、内的整合性の検証⁶⁾、さらに因子構造の交差妥当性についても確認され⁷⁾、JST-IC がどのような対象集団であっても安定した4因子構造が担保され、性別・年齢階級別の測定普遍性を有していることが報告されている。

③ Statistical Analysis (統計学的分析方法) ILSA-Jの2017±2年において収集されたJST-ICのデータについて総合点及び4つの下位尺度についてコホート別(地域別)、性別、年齢階級別、の平均点および標準偏差を求め、それらについての統計学的差異について、2群間の差異については(繰り返しのない)t検定、3群間以上については分散分析(ANOVA)に基づいて有意差を検定した。さらに異質性の検定については同一地域での異なる調査方法を有する2つのコホートに関しても分析を行った。

3) 結果

JST-IC 性別・年齢階級別標準得点および異質性についての分析は以下の通りであった。

JST版活動能力指標が男女間に差があるかを見るため、Meta-Analysis-Standard difference in meanの検証を行った。その結果、JSTの総合点においては、65-69歳では女性の平均が男性よりも高かった。他方で80歳以上では男性の方が高かった($p<0.001$)。

(表1、表2の説明：表の左の方は各年齢層の男女の平均値と標準誤差を示す。この数値は前のページに示されているeffect sizeの検証の結果である。表の右にある推定値の方には、男性と女性の平均値の差(mean difference)と推定されたstandard difference in meanが示されている。この推定された平均値の差に有意な差があるのかを判断したものがP.11、P.12Modelは、このstandard difference in meanを推定する際に用いたモデルである。)

(表3の説明：表の左の方は各年齢層の男女の平均値と標準誤差を示す。この数値は前のページに示されているeffect sizeの検証の結果である。表の右にある推定値の方には、男性と女性の平均値の差(mean difference)と推定されたstandard difference in meanが示されている。この推定された平均値の差に有意な差があるのかを判断したものがP.13Modelは、このstandard difference in meanを推定する際に用いたモデルである。)

地域高齢者の高次の生活機能を測定する新たな指標である、JST 版活動能力指標 (JST-IC) について、健診招待型の参加高齢者における性別・年齢別の平均値と標準偏差を求めた。性別においても年齢階級別においても平均値に有意差が認められ、地域高齢者の多様性、異質性が

においても年齢階級別においても平均値に有意差が認められ、地域高齢者の多様性、異質性が存在することが明らかとなった。今後はコホート別（地域別）、教育別など異質性に係る要因ごとの分析も進めてゆく必要がある。

表1 男性における年齢層別のJST版活動能力指標の平均

男性													
JST_総合													
Age group	N of study	Cohort	Effect size and 95% confidence interval					Heterogeneity				model	
			N of subject	Mean	SE	Variance	95% CI	Q-value	df(Q)	p	I-squared		
65-69	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	1,158	11.55	0.41	0.17	10.75	12.35	136.60	8.00	0.00	94.14	random
70-74	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	1,079	11.57	0.31	0.10	10.95	12.18	66.92	8.00	0.00	88.04	random
75-79	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	986	11.18	0.41	0.17	10.37	11.98	101.94	8.00	0.00	92.15	random
80-84	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	645	10.42	0.38	0.15	9.67	11.17	54.84	8.00	0.00	85.41	random
85-89	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	268	9.00	0.36	0.13	8.30	9.71	18.76	8.00	0.02	57.36	random
JST_新機器													
Age group	N of study	Cohort	Effect size and 95% confidence interval					Heterogeneity				model	
			N of subject	Mean	SE	Variance	95% CI	Q-value	df(Q)	p	I-squared		
65-69	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	1,158	3.67	0.05	0.00	3.56	3.77	44.05	8.00	0.00	81.84	random
70-74	8	B,C,F,G,J,K,L,M	1,134	3.34	0.08	0.01	3.18	3.50	44.96	7.00	0.00	84.43	random
75-79	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	1,047	3.14	0.10	0.01	2.94	3.33	53.33	8.00	0.00	85.00	random
80-84	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	707	2.67	0.14	0.02	2.40	2.95	51.02	8.00	0.00	84.32	random
85-89	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	300	2.01	0.15	0.02	1.72	2.29	20.89	8.00	0.01	61.70	random
JST_情報収集													
Age group	N of study	Cohort	Effect size and 95% confidence interval					Heterogeneity				model	
			N of subject	Mean	SE	Variance	95% CI	Q-value	df(Q)	p	I-squared		
65-69	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	1,157	3.23	0.09	0.01	3.05	3.40	54.91	8.00	0.00	85.43	random
70-74	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	1,127	3.23	0.07	0.01	3.08	3.38	40.78	8.00	0.00	80.38	random
75-79	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	1,050	3.17	0.09	0.01	2.99	3.35	48.32	8.00	0.00	83.45	random
80-84	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	709	3.21	0.13	0.02	2.94	3.47	97.62	8.00	0.00	91.80	random
85-89	8	B,C,F,G,J,K,L,M	292	2.97	0.13	0.02	2.72	3.22	23.17	7.00	0.00	69.79	random
JST_生活マネジメント													
Age group	N of study	Cohort	Effect size and 95% confidence interval					Heterogeneity				model	
			N of subject	Mean	SE	Variance	95% CI	Q-value	df(Q)	p	I-squared		
65-69	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	1,145	2.86	0.12	0.01	2.63	3.09	73.98	8.00	0.00	89.19	random
70-74	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	1,123	2.95	0.07	0.00	2.82	3.08	22.62	8.00	0.00	64.63	random
75-79	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	1,028	3.04	0.10	0.01	2.84	3.25	62.99	8.00	0.00	87.30	random
80-84	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	691	2.87	0.13	0.02	2.63	3.12	58.54	8.00	0.00	86.33	random
85-89	9	B,C,D,F,G,J,K,L,M	287	2.73	0.13	0.02	2.47	2.98	23.98	8.00	0.00	66.64	random
JST_社会参加													
Age group	N of study	Cohort	Effect size and 95% confidence interval					Heterogeneity				model	
			N of subject	Mean	SE	Variance	95% CI	Q-value	df(Q)	p	I-squared		
65-69	9	B,C,E,F,G,J,K,L,M	1,155	1.88	0.28	0.08	1.34	2.43	262.21	8.00	0.00	96.95	random
70-74	9	B,C,E,F,G,J,K,L,M	1,127	2.07	0.25	0.06	1.57	2.57	222.19	8.00	0.00	96.40	random
75-79	9	B,C,E,F,G,J,K,L,M	1,044	1.89	0.23	0.05	1.44	2.35	145.91	8.00	0.00	94.52	random
80-84	9	B,C,E,F,G,J,K,L,M	716	1.67	0.16	0.02	1.36	1.97	46.55	8.00	0.00	82.82	random
85-89	8	B,C,F,G,J,K,L,M	301	1.23	0.16	0.03	0.91	1.55	24.82	7.00	0.00	71.80	random

表2 女性における年齢層別のJST版活動能力指標の平均

女性													
JST_総合													
Age group	N of study	Cohort	Effects size and 95% confidence interval					Heterogeneity				model	
			N of subject	Mean	SE	Variance	95% CI	Q-value	df(Q)	p	I-squared		
65-69	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,675	12.22	0.27	0.08	11.68	12.76	140.87	9.00	0.00	93.61	random
70-74	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,700	11.75	0.28	0.08	11.19	12.31	139.72	9.00	0.00	93.56	random
75-79	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,458	10.87	0.27	0.07	10.33	11.40	85.78	9.00	0.00	89.51	random
80-84	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	771	9.69	0.40	0.16	8.91	10.47	92.14	9.00	0.00	90.23	random
85-89	8	B,C,F,G,J,K,L,M	264	7.71	0.56	0.31	6.62	8.79	46.37	7.00	0.00	84.90	random
JST_新機器													
Age group	N of study	Cohort	Effects size and 95% confidence interval					Heterogeneity				model	
			N of subject	Mean	SE	Variance	95% CI	Q-value	df(Q)	p	I-squared		
65-69	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,753	3.59	0.07	0.00	3.46	3.73	137.31	9.00	0.00	93.45	random
70-74	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,797	3.25	0.08	0.01	3.09	3.41	100.56	9.00	0.00	91.05	random
75-79	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,585	2.72	0.12	0.01	2.50	2.95	119.86	9.00	0.00	92.49	random
80-84	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	855	2.15	0.19	0.04	1.78	2.52	159.87	9.00	0.00	94.37	random
85-89	8	B,C,F,G,J,K,L,M	300	1.55	0.21	0.05	1.13	1.97	66.63	7.00	0.00	89.49	random
JST_情報収集													
Age group	N of study	Cohort	Effects size and 95% confidence interval					Heterogeneity				model	
			N of subject	Mean	SE	Variance	95% CI	Q-value	df(Q)	p	I-squared		
65-69	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,745	3.43	0.06	0.00	3.32	3.54	54.12	9.00	0.00	83.37	random
70-74	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,785	3.30	0.08	0.01	3.15	3.46	97.93	9.00	0.00	90.81	random
75-79	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,571	3.20	0.11	0.01	2.99	3.41	162.05	9.00	0.00	94.45	random
80-84	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	838	3.02	0.11	0.01	2.80	3.24	67.39	9.00	0.00	86.64	random
85-89	8	B,C,F,G,J,K,L,M	292	2.83	0.15	0.02	2.53	3.12	29.07	7.00	0.00	75.92	random
JST_生活マネジメント													
Age group	N of study	Cohort	Effects size and 95% confidence interval					Heterogeneity				model	
			N of subject	Mean	SE	Variance	95% CI	Q-value	df(Q)	p	I-squared		
65-69	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,734	3.39	0.05	0.00	3.30	3.48	32.60	9.00	0.00	72.39	random
70-74	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,781	3.34	0.06	0.00	3.23	3.46	57.60	9.00	0.00	84.37	random
75-79	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,544	3.18	0.06	0.00	3.06	3.29	40.44	9.00	0.00	77.74	random
80-84	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	835	2.90	0.08	0.01	2.74	3.06	38.02	9.00	0.00	76.33	random
85-89	8	B,C,F,G,J,K,L,M	294	2.36	0.07	0.00	2.22	2.49	12.93	7.00	0.07	45.85	fixed
JST_社会参加													
Age group	N of study	Cohort	Effects size and 95% confidence interval					Heterogeneity				model	
			N of subject	Mean	SE	Variance	95% CI	Q-value	df(Q)	p	I-squared		
65-69	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,743	1.83	0.17	0.03	1.49	2.17	200.42	9.00	0.00	95.51	random
70-74	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,822	1.84	0.17	0.03	1.50	2.18	224.56	9.00	0.00	95.99	random
75-79	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	1,604	1.72	0.15	0.02	1.42	2.03	150.57	9.00	0.00	94.02	random
80-84	10	B,C,D,E,F,G,J,K,L,M	870	1.58	0.23	0.05	1.12	2.04	212.23	9.00	0.00	95.76	random
85-89	8	B,C,F,G,J,K,L,M	300	1.00	0.21	0.04	0.60	1.41	65.17	7.00	0.00	89.26	random

表3 JST_総合

Age group	M a l e		F e m a l e		M e a n d i f f e r e n c e	E s t i m a t e d		M o d e l
	M e a n	S E	M e a n	S E		S t a n d a r d d i f f e r e n c e i n m e a n	p	
65-69	11.55	0.41	12.22	0.27	-0.67	-0.25	<.001	Fixed
70-74	11.57	0.31	11.75	0.28	-0.18	-0.07	0.09	Fixed
75-79	11.18	0.41	10.87	0.27	0.31	0.08	0.08	Fixed
80-84	10.42	0.38	9.69	0.40	0.73	0.18	<.00	Fixed
85-89	9.00	0.36	7.71	0.56	1.30	0.38	<.001	Fixed

4) 考察

本研究では、高齢者の新たな生活機能の測定指標であるJST-IC の利活用の一環として、日本の高齢者の健康水準の変動を明確にするための統合的な長期縦断研究ILSA-J における性・年齢階級別の得点分布をMeta-analysis を用いて明らかにした。Meta-analysisにおいては常に収集されたデータ間の異質性が問題となるが、本研究においても無視できない程度の異質性が検出され、それについての検討も行った。その結果、先の研究で明らかにされた制別、年齢階級別の差異以外にも教育歴やSESあるいはコホート（地域）別などの要因が考えられたが、中でも、先の我々のJST-ICに関する測定普遍性の分析時とは異なる対象者の募集方法、すなわち検診受診者であるか留め置き調査による対象者であるかの異なり（差異）によって、標準値が異なり、そのことが異質性に大きな影響を及ぼした可能性のあることが推定された。すなわち、検診受診者は一般的に健康意識が高く、保健行動にもより良い行動特性を示す集団であり、その結果測定されたデータは非受診者に比べより高値となり、いわば「上澄み」のデータであることが知られている（Suzuki T et al. 2003, 2012; In Japanese）。一方、留め置き調査における対象者は（検診受診者に比べ）応答率は高いものの測定データは低値（より悪いデータ）を示しやすく、非検診受診者に近い特性を有している可能性が大きいと考えられる。しかし、歩行速度や握力といった生活機能に関連する身体機能の測定は健診等における実測が必須の項目であり、留め置き調査などでは実施不可能であることから、コホート研究参加者でのデータでしか評価は不可能であり、本研究の知見と意義は十分にあるものと思われる。今後は在宅療養中の高齢者、要支援・要介護高齢者、施設入所者等の健康状態が必ずしも良好でない高齢者をも対象として調査を行い、我が国の高齢者全体における高次の生活機能を明らかにするとともに、当尺度の提要限界についても調べる必要があると思われる。また、今回用いたデータはILSA-J 参加コホートの男女別、年齢階級別の対象者数、平均値および標準偏差、最大値、最小値のみの集団的データのみであり個別のデータの集積ではないため、交絡要因を調整したデータ分析等は不可能であり、今後の課題として残されている。

5) 結論 (Summary)

日本の老化に関する長期縦断研究を統合したILSA-Jに参加する15のコホート研究（全対象者数22,322名）において、2017±2年のBase-line 調査での、最近新たに開発された高齢者の高次生活機能測定指標であるJST-ICに関して、Meta-analysisにより性別、年齢階級別の標準値（平均値±標準偏差）を示した。

さらに分析過程における異質性の探索を行い、対象者募集の方法すなわち招待型健診受診者であるか在宅での留め置き調査応答者であるかの差異が最も大きな要因の可能性あることを明らかにした。

文献

- 1) Suzuki T: Health status of older adults living in the community in Japan. Recent changes and significance in the super-aged society. *Geriatr Gerontol Int*, 2018
- 2) Lowton MP: Assessing the competence of older people. In: Kent DP, Kattenbaum R, Sherwood S, eds. *Research Planning and Action for the ELderly: the Power and Potential Social Science*. New York; Human Science Press, 1972; 122-143.
- 3) Suzuki T, Yoshida H, Masui Y, et al. Development of New Scale Measuring Functional Capacity for the Today' s Older Adults in Japan. *LIFE*, 2012, Nov. 2-4 (In Japanese).
- 4) Koyano W, Shibata H, Nakazato K, et al. Mearsurment of Competence: Reliability and Validity of the TMIG Index of Competence. *Arch Gerontol Geriatr*. 1991; 13: 103-116.
- 5) Iwasa H, Masui Y, Suzuki T, et al., Development of the Japan Science and Technology Agency Index of Competence to Assess Functional Capacity in Older Adults: Conceptual Definition and Preliminary Items. *Gerontol Geriatr Med*, 2015: 1-11, doi: 10.1177/2333721415609490.
- 6) Iwasa H, Masui Y, Suzuki T, et al. Assessing competence at a higher level among older adults: development of the Japan Science and Technology Agency Index of Competence (JST-IC). *Aging Clin Exp Res* 2018; 30: 383-393.
- 7) Iwasa H, Yoshida Y, Suzuki T, et al. (Kouseino Shihyou)
- 8) Suzuki T, Nishita Y, Jeong S et al. Are Japanese older adults rejuvenating ? Changes in Health-related measures among older community dwellers in the last decade. *Rejuvenation Res.*, 24: 37-48, 2021
- 9) Makisako H, Nishita Y, SuzukiT., et al. Trends in the prevalence of frailty in Japan: Pooled analyses from the ILSA-J. *Frailty & Aging*, 1-: 211-218, 2021
- 10) Nishita Y, Jeong S, Suzuki T, et al. Temporal trends in the cognitive function among community-dwelling older adults in Japan: Findings from ILSA-J integrated cohort study. *Arch Gerontolo Geriatr*, 2022; 104718.
- 11) Heterogeneity
- 12) JST-IC Manual

3. 研究業績

【論文】

- 1) Yoshida Y, Iwasa H, Kim H and Suzuki T. Association Between Neutrophil to Lymphocyte Ratio and Physical Function in Older Adults: A Community-Based Cross-sectional Study in Japan. Int. J. Environ. Res. Public Health 2022, 19, 8996. <https://doi.org/10.3390/ijerph19158996>.
- 2) Jeong S, Inoue Y, Suzuki T, et al. What Should Be Considered When Evaluating the Quality of Home Care? A Survey of Expert Opinions on the Evaluation of the Quality of Home Care in Japan. Int J Environ Res Public Health.19,2022;19,2361. doi.org/10.3390/ijerph19042361.
- 3) 鈴木隆雄. 「日本人の老化の特徴、若返る高齢者」抗加齢・老化制御 最新医療／ビジネス総覧 第3章 PP50-57, 2022.
- 4) 鈴木隆雄. 「日本の高齢者は若返っているか？－ILSA-J研究（その1）」日本医事新報 No.5122 P35-39, 2022
- 5) 鈴木隆雄. 「日本の高齢者は若返っているか？－ILSA-J研究（その2）」日本医事新報 No.5127 P36-39, 2022.

【学会発表】

- 1) 鈴木隆雄. 「フレイルフリー国民運動への取り組み～フレイル、ロコモ克服のための医学会宣言を踏まえて」 「21世紀医療フォーラム」2022年6月9日.
- 2) Suzuki T. 「On a Care of Multiple Cartilaginous Exostosis with Madelung' s Deformity from Aneolithic Yayoi Period in Japan」 The 1st Asia-Pacific Paleopathology Forum (APPPF). Kyoto, Japan July30-31, 2022.

【科研費などの助成金】

- 1) 「高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施推進に関わる懸賞のための研究」（厚生労働行政推進調査事業費）（代表者：津下一代、分担研究者：鈴木隆雄）
- 2) 長寿コホートの総合的研究(ILSA-J)－2次的データ収集と分析－（長寿医療研究開発費）（代表者：鈴木隆雄）

【その他の研究活動】

- 1) 高齢者の保健事業のあり方検討ワーキンググループ（厚生労働省保険局高齢者医療課）
- 2) 地域在住高齢者を対象とした大規模コホートによる乳・乳製品摂取と認知機能・心血管関連指標との関連性に関する研究（株式会社明治 受託研究）

1. 研究課題

- (1) 介護予防に関する研究
- (2) 老化に関する長期縦断研究
- (3) 従業員の主観的Well-beingを向上する介入プログラムの検討

2. 研究活動の概要

(1) 介護予防に関する研究

聖路加国際大学老年看護学研究室などと協働して、東京都中央区内で、転倒予防教室の活動を再開した。

東京都立川市の老人ホームにおいて、転倒予防プログラムとして運動・体操教室を継続した。

ダイヤ財団とともに考案したプログラム(ハッピープログラム)を軽度要介護高齢者の精神的健康維持・増進に用いた際の効果を検討する調査・活動を継続した。地域在住高齢者を対象とした在宅型こころの健康増進プログラムの検討も開始した。

(2) 老化に関する長期縦断研究

国立長寿医療研究センターNILS-LSA活用研究室の主催する「脳とこころの健康調査」（老化に関する長期縦断研究の追跡研究）に協力した。

(3) 従業員の主観的 Well-being を向上する介入プログラムの検討

ダイヤ財団などと協働し、「ハッピープログラム」を基に労働者のメンタルヘルスの向上に有用な修正版健康増進プログラムの開発を目指す研究を開始した。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 荒川 武士、樋口 康平、乗松 詩織、新野 直明：頭部屈曲運動が高齢の回復期リハビリテーション対象患者の嚥下能力に及ぼす影響:準ランダム化比較試験による検討、日摂食嚥下リハ会誌、査読有、26(2)、99-108、2022

【学会】

- 1) 浅野文孝、新野直明：歩行時における要介護高齢者の心拍数変化と関連する状況に関しての検討、第64回日本老年医学会、2022年6月、大阪
- 2) 安順姫、新野直明、他：うつ予防プログラムの実践状況及び参加回数と精神的健康状態との関係 —ポジティブ心理学的介入の手法を取り入れて—、第64回日本老年社会学会、2022年7月、東京
- 3) 安順姫、新野直明、他：ポジティブ心理学的介入の手法を取り入れたうつ予防プログラムの検討：プログラム実践にあたる参加者の自由記述から、第17回日本応用老年学会、2022年11月、福岡

【科研費などの助成金】

明治安田厚生事業団第38回若手研究者のための健康科学研究助成：地域在住高齢者を対象とした在宅型こころの健康増進プログラムの作成と効果検証（共同研究者）

【その他の活動】

「高齢者のための 転倒骨折予防実践講座」、るかなびミニ健康講座、2022年10月、12月

1. 研究課題

- (1) 農村部後期高齢者の聴力と高次生活機能との関連
- (2) 農村部在住後期高齢者のヘモグロビンA1cの2年間の変化とその関連要因
- (3) 農村部に在住する後期高齢者の情報通信機器および健康機器使用状況が1年間の心身機能の変化に及ぼす影響

2. 研究活動の概要

(1) 農村部後期高齢者の聴力と高次生活機能との関連

【目的】 農村部在住の後期高齢者の聴力と高次生活機能との関連を解明する。

【方法】 2021年4月にA村の後期高齢者健康診査対象者1,723人に、基本属性、JST版活動能力指標（JST-I）、老研式活動能力指標（TMIG-I）、聴力等に関する自記式調査票を郵送し健診受診時に回収した。有効回答を得た男性251名、女性282名について、聴力に関する10項目の分布を性、年齢階級別に比較した後、JST-I、TMIG-Iとの関連をt検定により有意水準5%にて検討した。さらに、JST-I、TMIG-Iの各下位尺度を従属変数、性、年齢を共変量とした共分散分析にて聴力の独立的関連を検討した。

【結果】 男性の82.1%、女性の74.1%に何らかの聞こえの問題がみられた。「会話の際に聞き返すことがある」が55.2%、「マスク着用により言葉が聞き取りにくいことがある」が49.5%、「聞き間違いが多い」が27.0%、「後ろから呼びかけられると気づかないことがある」が24.8%と多かった。性、年齢調整後、「会話の際に聞き返すことがある」「後ろからの呼びかけに気づかないことがある」「聞き間違いが多い」群は、JST-Iの新機種利用、情報収集、生活マネジメント得点が有意に低く、「マスク着用で言葉が聞き取りにくいことがある」群は、情報収集、生活マネジメント得点が有意に低かった。社会参加得点と聴力との有意な関連はなく、TMIG-Iの下位尺度と関連がみられた聴力の項目は少なかった。

【結論】 マスク着用により半数に聞こえの問題が生じていた。聴力低下は地域の社会活動や老研式活動能力指標にはあまり関連せず、より高次の生活機能に悪影響を及ぼすことが示された。

(2) 農村部在住後期高齢者のヘモグロビン A1c の2年間の変化とその関連要因

- 【目的】 高齢者のヘモグロビン (Hb) A1cは、糖尿病の診断や管理指標としての意義に加え、認知機能やフレイル等との関連がみられ、HbA1cとフレイル、死亡率やがん発症との関連ではU字関係が示されている。HbA1cは高齢期に上昇するとされるが後期高齢期の加齢変化の知見は少ない、そこで本研究は後期高齢者のHbA1cの2年間の変化の実態とその関連要因を明らかにすることを目的に実施した。
- 【方法】 2019年4月にA村で行われた75歳以上の住民を対象とした健診受診者の内、研究への同意およびHbA1cの測定値が得られた504名のデータをベースラインとした、2021年4月の同健診を受診しHbA1cの測定値が得られた316名を分析対象とした。HbA1cの変化の関連要因として、性別、年齢、BMI区分、世帯形態、暮らし向き、糖尿病治療薬の有無、身体活動、夕食後2時間以内に就寝する頻度、間食の有無、飲酒頻度等を検討した。HbA1cの変化については、3区分（低値群：5.6%未満、中間群：5.6%以上6.0%未満、高値群：6.0%以上）ごとに変化量（2021年値-2019年値）を検討した。HbA1c変化量の関連要因は、年齢、2019年のHbA1cを共変量とした共分散分析にて分析した。
- 【結果】 継続受診率は62.7%で、HbA1c区分による差はなかった。平均HbA1cは糖尿病治療の有無に関わらず2年間で5.84%から5.80%に低下した。HbA1cの低下には、就寝前2時間以内の夕食が週3回以上、時々の飲酒、スポーツや運動習慣有が有意に関連していた。
- 【考察】 本研究結果は先行研究と異なり、週3回以上夕食後2時間以内に就寝する群の方が、HbA1cの低下が大きく、とくにHbA1cが高い群でより顕著であった。背景として、本研究対象地域は農村であり、夕食時刻が一般より早いと考えられること、早めに就寝することにより副交感神経機能が亢進し、細胞内への糖の取り込みが増加する可能性などが考えられる。
- 【結論】 後期高齢期のHbA1cは2年間で低下し、その関連要因として、就寝前2時間以内の夕食頻度、時々の飲酒、スポーツや運動習慣が抽出された。

(3) 農村部に在住する後期高齢者の情報通信機器および健康機器使用状況が1年間の心身機能の変化に及ぼす影響

- 【目的】 本研究は、後期高齢者のICTおよび健康機器使用状況が1年後の生活機能や精神的健康状態に及ぼす影響を明らかにすることを目的として実施した。
- 【方法】 2021年4月にA村の後期高齢者健康診査対象者1,721人に、性別、年齢、世帯形態、老研式活動能力指標 (TMIG-I)、JST版活動能力指標 (JST-I)、精神的健康状態 (WHO-5-J)、ICTおよび健康機器使用状況等に関する自記式調査票を郵送し、健診時に回収した。調査への同意、有効回答を得た、男性225名、女性255名をベースライン調査分析対象者とした。2022年5月に同様に実施した追跡調査の有効回答を得た男性153名、女性146名を追跡調査の分析対象とした。TMIG-I、JST-I、WHO-5-Jの変化量を従属変数とし、各指標の2021年の値を共変量、性別、年齢区分および、携帯電話、ス

マホ、PC、万歩計・身体活動量計、血圧計、体重計について使用の有無を独立変数とした共分散分析にて各々の電子機器使用状況が1年間の各心身機能指標の変化に及ぼす影響を検討した。

【結果】 機器使用率は、携帯電話64.8%、スマホ24.6%、PC12.4%、万歩計・身体活動量計35.1%、血圧計76.0%、体重計79.0%であった。TMIG-Iの低下抑制には、携帯電話、万歩計や身体活動量計、血圧計および体重計使用が有意に関連した。JST-Iの下位尺度生活マネジメント得点の低下抑制に、万歩計や身体活動量計使用、WHO-5-Jの低下抑制には、血圧計未使用のみ有意な関連が認められた。スマホやPCの使用は1年間の心身健康指標との関連はみられなかった。

【考察】 携帯電話と健康機器の利用は後期高齢者のTMIG-Iの低下予防に寄与すると考えられる。一方、スマホやPCの利用は高次生活機能の変化と関連しなかったことから、横断研究でみられる関係の因果の方向性としては、高次生活機能がこれらの利用を規定しているものと考えられる。血圧計の使用がWHO-5-Jの低下と関連した背景には、高血圧症の治療の有無や生活習慣の是正の度合などが交絡している可能性がある。

【結論】 携帯電話および健康機器（血圧計、体重計、万歩計や身体活動量計）の利用は、1年後のTMIG-Iの低下を抑制していた。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 渡辺修一郎：第9章 高齢者の健康管理（野尻雅美監修，北池正編集）最新保健学 公衆衛生・疫学 改定第2版. 178-198, 中央法規, 東京, 2018.

【論文】

- 1) Abe Takumi, Fujita Koji, Sagara Tomoya, Ishibashi Tomoaki, Morishita Kumi, Murayama Hiroshi, Sakurai Ryota, Osuka Yosuke, Watanabe Shuichiro, Fujiwara Yoshinori.: Associations between frailty status, work-related accidents and efforts for safe work among older workers in Tokyo: A cross-sectional study. *Geriatr Gerontol Int.* 2023 Feb 6. doi: 10.1111/ggi.14557.
- 2) Nemoto Yuta, Nonaka Kumiko, Kuraoka Masataka, Murayama Sachiko, Tanaka Motoki, Matsunaga Hiroko, Murayama Yoh, Murayama Hiroshi, Kobayashi Erika, Inaba Yoji, Watanabe Shuichiro, Maruo Kazushi, Fujiwara Yoshinori.: Effects of intergenerational contact on social capital in community-dwelling adults aged 25-84 years: a non-randomized community-based intervention. *BMC Public Health.* 2022 Sep 24;22(1):1815. doi: 10.1186/s12889-022-14205-6.
- 3) Ando Masaaka, Kamide Naoto, Sakamoto Miki, Shiba Yoshitaka, Sato Haruhiko, Kawamura Akie, Watanabe Shuichiro.: The Effects of Neighborhood Physical and Social Environment on Physical Function among Japanese Community-Dwelling Older Adults: A One-Year Longitudinal Study. *Int J Environ Res Public Health.* 2022 Jun 29;19(13):7999. doi: 10.3390/ijerph19137999.

- 4) 柴田博, 渡辺修一郎, 萩原真由美: 日本人の粗食長寿信奉 - その系譜と超克への試み - . 応用老年学, 16(1): 145-153, 2022.
- 5) 佐々木華香, 渡辺修一郎: フラワーアレンジメントがデイサービス利用高齢者の精神的健康状態に及ぼす効果 - 日本語版WH0-5精神的健康状態表を指標として - , 応用老年学, 16(1): 99-107, 2022.
- 6) 阿部祐美子, 渡辺修一郎, 伊藤直子: サービス付き高齢者向け住宅入居者の生活満足度と義歯使用および應下機能との関連. 応用老年学, 16(1): 108-118, 2022.

【学会発表】

- 1) 安藤雅峻, 上出直人, 坂本美喜, 渡辺修一郎: 地域在住高齢者における社会参加の多様性と運動機能との関連: 横断的観察研究. 第64回日本老年医学会学術集会, 2022.6.4.
- 2) 渡辺修一郎, 杉崎きみの, 石川歳江, 鈴木香, 田辺生子, 井上智代: 農村部後期高齢者の聴力と高次生活機能との関連. 日本老年社会科学会第64回大会, 2022.7.2~7.3.
- 3) 渡辺修一郎, 井上智代, 田辺生子, 根岸哲也: 農村部に在住する後期高齢者のヘモグロビン(Hb) A1cの2年間の変化とその関連要因. 第81回日本公衆衛生学会総会, 2022.10.7~10.9.
- 4) 相良友哉, 阿部巧, 藤田幸司, 石橋智昭, 森下久美, 村山洋史, 桜井良太, 大須賀洋祐, 渡辺修一郎, 藤原佳典: 都内シルバー人材センター会員が従事する主な業務における事故および怪我の実態. 第81回日本公衆衛生学会総会, 2022.10.7~10.9.
- 5) 阿部巧, 藤田幸司, 相良友哉, 石橋智昭, 森下久美, 村山洋史, 桜井良太, 大須賀洋祐, 渡辺修一郎, 藤原佳典: シルバー人材センター会員におけるフレイルと安全就業との関連性. 第81回日本公衆衛生学会総会, 2022.10.7~10.9.
- 6) 渡辺修一郎, : 高齢者のQOLと介護予防, 高齢者の医療と福祉(高齢者グループ) 2021/2022年度活動報告. 日本公衆衛生学会拡大公衆衛生モニタリング・レポート委員会. 第81回日本公衆衛生学会総会, 2022.10.7~10.9.
- 7) 渡辺修一郎, 根岸哲也, 有田昌代, 森下久美: 農村部に在住する後期高齢者の情報通信機器および健康機器使用状況が1年間の心身機能の変化に及ぼす影響. 第17回日本応用老年学会大会, 2022.11.12~11.13.
- 8) 相良友哉, 阿部巧, 藤田幸司, 石橋智昭, 森下久美, 村山洋史, 桜井良太, 大須賀洋祐, 渡辺修一郎, 藤原佳典: 安全就業研修会への参加が非積極的なシルバー人材センター会員の特性に関する検討: 都内7センターの会員を対象にして. 第17回日本応用老年学会大会, 2022/11/12-13.
- 9) 渡辺修一郎: 日本の高齢者の就業状況. 桜美林大学・北京大学シンポジウム「日中高齢化社会の現状と課題」, 2022.12.10.

【その他発表】

- 1) 渡辺修一郎: 中高年からの骨折予防・転倒予防. 身体をつくる健康づくり講演会, 川崎市麻生区, 2022.11.21

【科研費などの助成金】

- 1) 2022年度長寿医療研究開発費「長寿コホートの総合的研究 (ILSA-J) -2 次的データ収集と分析-」(分担研究者)
- 2) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B))：シルバー人材センター会員に着目した高齢就業者の安全・健康管理に向けた要因の解明(分担研究者)
- 3) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))：地域在住高齢者の口腔機能向上を目指した呼吸筋トレーニングプログラムの確立(分担研究者)
- 4) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))：高齢者の熱中症リスクスクリーニング質問紙の開発(分担研究者)
- 5) 戦略的情報通信研究開発推進事業(国際標準獲得型)研究開発課題「日-EU共同研究」スマートエイジングを目指す日欧共同仮想コーチングシステム(分担研究者)

【その他の研究活動】

- 1) 東京都健康長寿医療センター研究所，社会参加と地域保健研究チーム協力研究員として，社会参加と地域保健に関する研究に従事.
- 2) 志木市介護保険事業計画策定委員会委員長として志木市介護保険事業計画に関する調査研究に従事.
- 3) 公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団客員研究員としてシルバー人材センター会員の就業と健康に関する研究に従事.
- 4) 公益財団法人大原記念労働科学研究所の客員研究員として高齢者の就労と健康に関する研究に従事.
- 5) 世田谷区の健康きたざわプラン推進委員として健康きたざわプランの評価に関する研究に従事.

1. 研究課題

- (1) 社会福祉士および介護福祉士国家試験受験者に対する支援のあり方について
- (2) 発達障害をもつ児童のソーシャルスキル獲得のための支援について

2. 研究活動の概要

1) 介護福祉士国家試験・社会福祉士国家試験 受験対策図書等の執筆

全国社会福祉協議会、中央法規出版、メディックメディア、世界文化社の受験対策図書等を執筆した。

2) 介護福祉士国家試験 受験対策セミナーの講師

静岡福祉大学、横浜市福祉サービス協会の受験対策セミナー講師を務めた。

3) 社会福祉士国家試験 受験対策セミナーの講師

東北福祉大学の受験対策セミナー講師を務めた。

4) 大学の非常勤講師

田園調布学園大学 非常勤講師として、介護福祉学特講Ⅰ、Ⅱを担当した。

3. 研究業績

【著書】

- 1) 『社会福祉学習双書2022 第15巻 介護概論』共著、澤田信子、川井太加子、秋山昌江、井上善行、津田理恵子、竹田幸司、横山孝子、澤宣夫、堀口美奈子、木本洋子、鎌田恵子、竹内美幸、青木宏心、池田静香、檜垣昌也、小櫃芳江、西井啓子、八木裕子、木林身江子、全国社会福祉協議会、東京、2022年2月。
- 2) 『クエスチョンバンク 介護福祉士国家試験問題解説2023』共著、青木宏心、赤羽克子、秋山美栄子、新井恵子、飯塚慶子、奥田紀久子、加藤英池子、後藤佳苗、佐伯久美子、佐々木宰、鈴木政史、角田ますみ、竹田幸司、谷口泰司、濱田竜也、林裕栄、松村美枝子、馬淵敦士、南牧生、宮崎伸一、メディックメディア、東京、2022年4月。

- 3) 『介護福祉士国家試験過去問解説集 2023』共著、青木宏心、石岡周平、伊東一郎、井上修一、岩川亮太、大久保功、大田京子、太田つぐみ、大西典子、大谷佳子、亀島千枝、金美辰、小林哲也、白井孝子、竹田幸司、千葉安代、中岡勉、長山圭子、能田茂代、馬場千草、東野幸夫、東原由佳、飛田和樹、廣瀬圭子、福島岳志、古市孝義、堀米史一、前田美貴、松井康成、宮元預羽、八城薫、山下喜代美、山田誠峰、山田弥生、渡邊祐紀、中央法規出版、東京、2022年4月。
- 4) 『介護福祉士国家試験 らくらく暗記マスター2023』共著、青木宏心、佐伯久美子、松崎匡、中央法規出版、東京、2022年6月。
- 5) 『社会福祉士国家試験 らくらく暗記マスター2023』単著、青木宏心、中央法規出版、東京、2022年6月。
- 6) 『介護福祉士国家試験 書いて覚える合格ドリル2023』編著、青木宏心、佐伯久美子、竹田幸司、渡邊祐紀、中央法規出版、東京、2022年5月。
- 7) 『介護福祉士国家試験 ここからはじめる！スタートブック2023』共著、青木宏心、亀島千枝、佐伯久美子、竹田幸司、中央法規出版、東京、2022年4月。
- 8) 『へるばる 2022 3・4月号』共著、世界文化社、東京、2023年1月。
- 9) 『おはよう21』、「介護福祉士国家試験 合格塾2023」単著、中央法規出版、東京、2022年4月号～2023年2月号（全11回連載）

【その他の研究活動】

- 1) 介護福祉士国家試験受験対策講座 講師
 - ①横浜市福祉サービス協会：全科目【神奈川県】（2022年10月22日）
 - ②横浜市福祉サービス協会：全科目【神奈川県】（2022年10月23日）
 - ③静岡福祉大学：全科目【静岡県】（2022年12月4日）
- 2) 社会福祉士国家試験受験対策講座 講師
 - ①東北福祉大学：全科目【宮城県】（2022年10月1日）
- 3) 田園調布学園大学 非常勤講師
 - ①介護福祉学特講Ⅰ【神奈川県】（2022年9月～2023年1月）
 - ②介護福祉学特講Ⅱ【神奈川県】（2022年4月～2022年7月）
- 4) 藤沢市社会福祉協議会 介護職員初任者研修 講師
 - ①死にゆく人に関するところとからだのしくみと終末期介護（2023年1月14日）
 - ②介護過程の基礎的理解（2023年1月14日）
- 5) 社会的活動
 - ①社会福祉法人仁正会 評議員
 - ②社会福祉法人相模翔優会 第三者委員

③社会福祉法人相模翔優会 選任解任委員

④カンボジア学校法人 KAIGO日本語学院 顧問

1. 研究課題

歩行時における要介護高齢者の心拍数変化と関連する状況についての検討

2. 研究活動の概要

研究目的：高齢者が街路を歩行する際に心拍数が増加する状況とはどのような状況であるのか、「バリア」と成り得る状況なのか、Global Positioning System（以下GPS）を使用して位置を把握し、その位置の状況を詳細に検証する。

研究の結果：5名の対象者で心拍上昇の位置が多かった区間は「信号のある横断歩道周辺」「坂」「工事建物前」「歩道の狭窄と隣接するところで工事を行っていたところ」であった。主なバリアがないにもかかわらず心拍数の上昇がみられた区間があるが、この区間は、車や自転車とのすれ違いが他と比較して多い区間であった。

考察：心拍数が増加する位置がまとまっている場所は物理的なバリアだけでなく、心理的バリアと成り得るものが存在するという可能性が示唆され、心拍数を継続的に記録されたものを検証することで、対象者が置かれていた状況のある程度推察することができると考えられた。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 浅野文孝, 新野直明. 歩行時における要介護高齢者の心拍数変化と関連する状況についての検討. 第64回日本老年医学会学術集会（2022年5月2-4日）. 大阪. 会長奨励演題賞受賞

1. 研究課題

高齢者領域における音楽活動などによるアクティビティケアの可能性と課題

2. 研究活動の概要

高齢者対象の音楽や各種アクティビティプログラムは、各種施設や病院、地域、介護予防事業などにおいて、定期的もしくは単発イベント等の枠組みとして幅広く実践されている。担当は各領域の専門家、地域の有償・無償のボランティア、介護職員など様々である。その実践先によるが、高齢者対象の実践に求められる内容は任せられることが多い。また時間経過と共に、対象の高齢者も変化している。改めて音楽や各プログラムの可能性や課題を探ることを継続中である。

昨年度に引き続きコロナ禍であり、軽度認知障害者対象者の音楽プログラムや認知症カフェは中止と再開を繰り返した。そのため、外出回数の激減による身体的フレイルや他者との交流機会減少による認知機能低下が懸念された。

また、音楽療法やアクティビティ関係の研修や大会もオンライン開催となった。全国の関係者が画面上で繋がることで、場や時間を共有することができた。対面での実践が困難な場合の興味深い経験である。対面の実践が再開された後も、視点を変え、視野を広げ、具体的な一つの方法としてオンライン活用は効果的な手段だと思われる。

3. 研究業績

- ①「2022年度スマートエイジングを目指す日欧共同仮想コーチングシステムの研究開発にかかる調査」に被検者として参加
- ②「2022年度長寿医療研究開発費「長寿コホートの総合的研究－2次的データ収集と分析－」にかかる孺恋村健康調査に調査員として参加
- ③渡辺修一郎、根岸哲也、有田昌代、森下久美：農村部に在住する後期高齢者の情報通信機器および健康機器使用状況が1年間の心身機能の変化に及ぼす影響：第17回日本応用老年学会、2022.11.12
- ④勝谷紀子、佐野智子：漫画における聴覚障害者の描写の検討、日本特殊教育学会、2022.9.17に研究協力し、これは論文化の予定である。

4. その他

①総合大学の選択科目「介護予防」で、介護予防における音楽活用の視点での講義を1コマ担当した。コロナ禍ではあったが、対面にて実践も可能だったことは幸いだった。

②実践

- 1) 東京都心の高級有料老人ホームで、能動的参加の音楽活動実践の機会を得た。入居者の年齢や認知機能には大きな差が見受けられた。生活の場での音楽プログラムの様々な可能性や限界が示唆された。高齢者の入居ホームとはいえ、福祉領域とは様々に異なる環境である。企業経営側の考え方、取り組み方が反映される場であることを再認識した。
- 2) 軽度認知障害者対象のメモリークリニックのデイケアで、認知機能トレーニングとしての音楽プログラム実践の機会を得ている。実際の参加者は、認知症初期から中程度、年齢も80歳代から若年性認知症の50歳代の方まで様々な参加者も対象とすることになる。デイケアとしては、身体を動かすことや認知機能を刺激する様々なプログラムが提供されている。介護保険対応のデイサービスと違って、クリニックまでの送迎は行われていない。送迎にも支援が必要な方もおられ、すべての意味で参加者の年齢差、目的、希望、レベル差がプログラム提供側の課題となっている。
- 3) 認知症疾患医療センターであるメンタルクリニックでは、軽度認知障害在宅高齢者を対象としたプログラム、及びに認知症カフェ（認知症本人や介護家族、関係者対象）において、音楽活動枠を担当している。3年間のコロナ禍の影響もあり、認知機能低下が顕著で参加継続が困難となった方もおられる。福祉分野など周辺関係者の支援が必要となった。
- 4) 高齢者アクティビティ開発センター主催の全国大会(オンライン)において、手工芸講座の講師を担当した(2023.1.28)。入居ホームなどでも職員不足などの各種事情があり、録画を使ってのアクティビティ提供が増加傾向にある。参加高齢者との直接的な関係性が取りにくく、その変化なども捉えにくいという状況があることは否めない。また提供する内容にも工夫の余地があり、アクティビティは多くの課題を抱えていることが改めて示唆された。

1. 研究課題

- (1) COVID-19の行動制限が地域在住高齢者の社会参加や精神的健康に及ぼす影響
- (2) 中学生の学習支援を目的とした子ども食堂の効果検証と普及に向けたモデルの構築

2. 研究活動の概要

(1) COVID-19の行動制限が地域在住高齢者の社会参加や精神的健康に及ぼす影響

2019年12月および2020年7月に神奈川県綾瀬市と共同で実施した調査から、第一回目緊急事態宣言による高齢者の行動制限の実態と社会参加および精神的健康への影響について検討した。その結果、2時点目で約7割が外出自粛を継続し、社会参加が制限されることにより幸福感の低下やうつ症状の発生への影響が示された。これらの研究成果は、現在も学術誌に投稿し査読中である。

(2) 中学生の学習支援を目的とした子ども食堂の効果検証と普及に向けたモデルの構築

ロジックモデルを用いたプログラムの形成的評価を行い、事業の見直しを図っているところである。学会発表・論文執筆に向けて鋭意取り組んでいる。

3. 研究業績

【論文】

- 1) 池田晋平, 長谷川裕司, 関本繁樹, 王建人, 平井美佳, 芳賀博: COVID-19の流行下における行動制限が地域在住高齢者の主観的健康感の悪化に及ぼす影響. 作業療法41(4),427-435,2022.
- 2) 井口理, 池田晋平, 一色喜保, 山岸貴子, 大木正隆: 都市部における町会・自治会の互助の機能に関する評価尺度の予備調査－互助を促す支援者が活用する尺度開発に向けて－. 厚生指標69(8),23-31,2022.
- 3) 池田晋平, 長谷川裕司, 関本繁樹, 王建人, 平井美佳, 芳賀博: COVID-19の感染拡大における地域活動の参加数の変化が地域在住高齢者の幸福感に及ぼす影響. 厚生指標69(6),2-7,2022.

【学会発表】

COVID-19の流行初期における地域在住高齢者のうつ傾向の実態と関連要因（第64回日本老年社会科学大会，7月2日～3日，東京）

【科研費などの助成金】

中学生の学習支援を目的とした子ども食堂の効果検証と普及に向けたモデルの構築（若手研究；2020年4月～2023年3月）

1. 研究課題

特別養護老人ホームに勤務する機能訓練指導員の取り組みと役割、施設における方法について

2. 研究活動の概要

修士課程では重度化が進む特別養護老人ホームの入所者に対して機能訓練指導員がどのような取り組みや考えをもっているか、さらに多職種で進めているかを機能訓練指導員にたいして質的調査を行い分析した。それに引き続き東京都内の特養の機能訓練指導員に対して質問紙によりアンケート調査を行い、量的分析を行ったものを執筆中である。さらに多職種や役職者に関する研究をする必要があり、そちらについての研究を検討している。

3. 研究業績

【論文】

「特別養護老人ホームにおける機能訓練体制構築のための取り組み－機能訓練指導員の他職種連携を基盤に「できている部分」に着目して－」植田大雅 厚生指針第69巻第15号 2022年12月

【学会発表】

- 1) 第64回 日本老年社会科学学会「特別養護老人ホームに勤務する機能訓練指導員職場満足度に関する研究」植田大雅
- 2) 第22回 人間福祉学会「特別養護老人ホームに勤務する機能訓練指導員の他職種連携において『できていない部分』に関する研究」植田大雅

【その他の研究活動】

東京都社会福祉協議会東京都高齢者福祉施設協議会
職員研修委員会機能訓練指導員研修委員会代表幹事（12年目継続）として研修会企画・運営

1. 研究課題

- (1) 高齢者とメディア
- (2) 高齢者とコミュニケーション
- (3) 高齢者・障害者と福祉

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者とメディア

高齢者がメディアの中でどのように描かれているのかを検証する。

また、社会的弱者のイメージがクローズアップされがちな高齢者の“自立した姿”を発信するとともに、高齢者向けの生活情報を紹介する。

(2) 高齢者とコミュニケーション

高齢者とコミュニケーションを図る時の音声表現などについて研究し、その成果を発信する。

(3) 高齢者・障害者と福祉

社会的弱者とされる高齢者・女性・障害者の福祉情報を取材・発信するとともに問題提起や世論喚起をめざす。

3. 研究業績

【番組制作および出演】

1) 「ラジオ深夜便」(NHKラジオ第一放送)

高齢者の暮らしにかかわる番組の企画・制作。2016年4月よりレギュラーコーナー「わたし終いの極意」の企画・制作・インタビューを担当。人生のゴールを迎えるその日までを健やかに暮らすヒントや心構え、終いの極意を聞く。

2022年

- 4月 歌手 綾戸智恵さん
- 5月 バイオリニスト 佐藤美代子さん
- 6月 編み物作家 伊藤浩子さん
- 7月 歌手 増田恵子さん
- 8月 歌手 アグネス・チャンさん
- 9月 俳優・タレント うつみ宮土理さん
- 10月 歌手 大庭照子さん
- 11月 タレント マッハ文朱さん
- 12月 全国骨髄バンク推進連絡協議会副会長 大谷貴子さん
わたし終いの極意傑作選①マリンバ奏者 安倍圭子さん
②銭湯絵師 中島盛夫さん
③タレント ルー大柴代さん
④立教大学社会デザイン研究所研究員 星野哲さん

2023年

- 1月 歌手 ボニージャックスのみなさん
 - 2月 精神科医・作家 帚木蓬生さん
 - 3月 一級建築士 吉田紗栄子さん
- そのほか、以下のインタビュー企画・制作
- 「日本歌曲の世界へようこそ」声楽家・医師 神戸孝夫さん
 - 「三浦雄一郎 卒寿の挑戦」プロスキーヤー 三浦雄一郎さん
 - 「視覚障害者だけのナレーター事務所」代表 荒牧友佳理さん
 - 「摂食嚥下障害でも一緒に楽しくもぐもぐを！」一般社団法人代表 加藤さくらさん
 - 「片づけで輝く 人生のミラーボール」芸人 平野ノラさん

2) 「NHKジャーナル」(NHKラジオ第一放送)

医療健康情報「尿の“ちょいもれ” セルフケアで対策を！」

3) 視覚障害ナビラジオ(NHKラジオ第2放送)

主に視覚に障害のある人に向けた情報番組。企画・制作やスタジオMCを担当。

最新のニュースや役立つ生活情報の発信のほか、さまざまな活動に取り組む当事者を取材。視覚障害と向き合いつつ、はつらつと生きる高齢者やそのQOLを高める研究開発について取材・制作したものを抜粋記載。

「“歩く”がつくる未来～単独歩行の夢をかなえる新技術」

「息子の人生変えたクライミングで恩返し」

「視覚障害者の拠点・いわきの兎渡路の家によろこそ！」

「歌い継がれる戦盲歌」

「パラ競泳のエース、ハーフマラソンに挑戦」

「リンクスクエア イン 愛媛」(松山での公開収録)

【その他の研究活動】

- 1) 通販情報誌「えがおで元気」 エッセイ「“華齡”な人々」連載
- 2) 終活大学校キックオフ授業
「いくつになってもスタートするのに遅すぎることはない」
- 3) 日本BPW連合会 講演 「生きづらさを抱えた人たち」
- 4) 町田夢コレクション シニアファッションショー 司会
- 5) 弱視問題研究会 講演 「ビジネススキル術アップ～自分を伝える話し方」
- 6) 大学で、プレゼンテーションや高齢者とのコミュニケーションに関する講義を実施
 - ・桜美林大学「アカデミックプレゼンテーション」「口語表現発展演習」「口語表現Ⅱ」
 - ・東京経済大学「日本語表現Ⅰ」「日本語表現Ⅱ」
 - ・フェリス女学院大学「放送文化と制度」
 - ・放送大学 スピーチとコミュニケーション
 - ・長正学園 コミュニケーション論

1. 研究課題

- (1) 高齢慢性疾患患者における服薬アドヒアランスに影響する要因に関して社会的認知理論を応用して検討する。
- (2) 高齢慢性疾患患者の服薬アドヒアランスに関して中高年者と比較することでライフコースが与える影響を検討する。

2. 研究活動の概要

- (1) 地域薬局利用者に対しての質問紙調査を実施
- (2) 中高年者と高齢者の慢性疾患患者に対して質的調査を実施
- (3) 上記内容を投稿すべく論文執筆中

3. 研究業績

【論文・研究ノート】

OTC医薬品普及啓発イベント参加者の備蓄薬の実態調査を通じたOTC医薬品ニーズの分析
柴田 淑子, 坂口 眞弓, 田中 雪葉, 押切 康子, 大部 令絵
日本薬局学会誌 発行日: 2023年[早期公開] 公開日: 2023/02/15

【著書】

治療 Vol. 104 No.11 (2022. 11) 1343-1346
プライマリ・ケア医が知っておきたいOTC薬・健康食品のこと (骨粗鬆症)

1. 研究課題

高齢男性の家事参加の規定要因に関する研究

2. 研究活動の概要

【目的】 有配偶高齢男性の家事参加に対する時間的余裕，相対的資源，ジェンダー・イデオロギー，育児期妻フルタイムという個人レベル要因の効果を，ジェンダー不平等の高い国では，家事分担では減少させるという仮説，男性の家事時間では減少させないという仮説を検討する。

【方法】 International Social Survey Programmeの「家庭と男女の役割」調査（2012年実施）の39の国／地域の50歳以上の有配偶男性のデータを用い，階層線形モデルにより分析する。

【結果・考察】 家事時間では，国／地域レベルのジェンダー平等度は個人レベルの規定要因と統計的に有意な交互作用効果がなく，男性全体についての先行研究と同様，減弱化効果仮説が支持されなかった。家事分担では，ジェンダー・イデオロギーに対してのみ弱い減弱化効果があったが，他の要因では減弱化効果が得られず，先行研究とは異なる結果であった。理由としては，出生コホート（現役時代がより男性中心の社会）が考えられる。

3. 研究業績

【論文】

小野寺典子、杉澤秀博、国／地域のジェンダー平等度と高齢有配偶男性の家事参加
—世界規模の調査データの分析から—老年学雑誌（掲載予定）

【学会発表】

小野寺典子、杉澤秀博、国／地域のジェンダー平等度と高齢有配偶男性の家事参加
—世界規模の調査データの分析から—第64回日本老年社会学会

1. 研究課題

- (1) 地域高齢者の低栄養に関する調査・研究
- (2) 産業保健における高齢者就労支援

2. 研究活動の概要

(1) 地域高齢者の低栄養に関する調査・研究

高齢者は、種々の要因（社会的、精神的心理的、加齢、疾病）などから低栄養に陥りやすい。栄養不足が持続すると、血中のアルブミンが減少しフレイルに移行することにより、認知機能低下や疾病が重篤すると言われている。地域で暮らす高齢者の早期の低栄養予防が求められている。

(2) 産業保健における高齢者就労支援

産業保健の現場において、高齢労働者における健康課題となる疾病の増加、高齢者に生じる機能低下、高齢者の直面する心理社会的問題があり、その実態と支援方法について情報収集する。

3. 研究業績

(1) 地域高齢者の低栄養に関する調査・研究

2019年、地域高齢者に配食の機会を通じた健康支援「健康支援型配食サービス」の推進が示された。このサービスは、地域高齢者の低栄養・フレイル予防となり「認定栄養ケアステーション」や「まちかど健康相談室」など情報収集中。

(2) 産業保健における高齢者就労支援

- ・企業健診における年齢別健康リスクを分析した。有効回答者303名で各年代別に比較した結果、60代以上は、肥満（33.3%） 血圧（22.2%） 血糖（22.2%）の健康リスクが、他の年代に比

較すると最も高い結果であった。運動習慣のない割合は28.8%、睡眠で十分休養が取れていない割合は55.5%を示した。

企業内中央安全衛生委員会報告 2022.2

・企業内外広報誌コラム執筆

「免疫をあげる生活習慣」 2022.6

「腸内細菌と免疫の関係」 2022.9

「ストレスとの付き合い方」 2023.2

1. 研究課題

高齢期の健康関連レジリエンス尺度の開発及び内容的妥当性、関連要因、分析例の検討

2. 研究活動の概要

WHO (2015) の提言を参考に高齢期のレジリエンスを、逆境に直面しても生活機能のレベルを維持、改善する能力と捉えた。高齢期では老化と死の接近という逆境が進行的かつ不可避であるが、その一方でこれまでの経験による高齢期特有の能力、あるいは認知・脳の予備力、運動を介した生物学的可塑性のような独自の特徴が報告されている。これらを踏まえ本研究では、高齢期のレジリエンスについて、尺度の開発と高める方法、活用例を検討した。認知症やフレイル予防に資する結果を得るために、今後更に考察を重ねる予定である。

(1) レジリエンス尺度の内容的妥当性の検討

最終量的調査に使用する23候補項目の内容的妥当性について、尺度開発の項目検討調査とは別の対象者において (COSMIN参照) 検討した。地域高齢者 (7人、うち女性は3人、70歳代6人、80歳代1人) を対象とし、調査票調査とフォーカスグループインタビュー (FGI) 調査を行った。調査票調査では項目に関する指摘事項は無かった。FGI調査では4つのサブテーマを得、構成概念に加えた。調査を通じて内容的妥当性のある最終23候補項目が決定し、同時に構成概念も洗練された。

(2) レジリエンス尺度の開発

レジリエンスの構成概念の一般的なモデルである心理社会モデルと、相互作用論に生物学的視点など昨今の知見を加えた独自モデルを、確証的因子分析 (CFA) を通じて比較し、最適モデルについて検討した。研究はCOSMINに準拠したインターネット調査 (N=400, 70歳以上, 女性60%) を行い、最小限の努力しか払わない回答者は分析前に除外した。最初のCFA (n=349, 40項目) では、心理社会的モデル (AIC=565.132) と独自モデル (AIC=321.667) を比較し、独自モデル17項目を採用した。次に内容的妥当性を得た23項目を使用し、独自モデルの改善を行った。CFA (n=380) の結果、AIC=282.775, GFI=.940, CFI=.952, RMSEA=.046という良好な結果を得た。再検査信頼性ICC=.933 (n=47), 内的一貫性 α =.881, 併存的・収束的妥当性 r =.397~.633だった。独自モデルの構成概念は、経験知、人生の目的、ヒトとの関係志向、意識的健康管理である。

(3) レジリエンスに影響を与える要因

高齢期のレジリエンスに影響を与える要因について、steeling effect (強化効果)、認知や脳の予備力、レジリエンスの関連要因の3種の先行研究の知見に、高齢期特有の要因(死の認識)を加えて検討した。インターネット調査(上記参照)における適格者(n=380)を対象に分析した。測度は、従属変数はレジリエンス、独立変数は死の認識(親しい人を亡くす、主治医有、最期の話し合い)、運動習慣、健康度自己評価、孤独感、うつの疑いあり、脳卒中などの疾病経験、教育年数、性別、年齢、世帯人数だった。レジリエンス得点の4分位グループに対しx² 検定あるいは一元配置分散分析を行ない線形の傾向を確認したのち、全項目を投入し全体及男女別に重回帰分析を行った。主治医がいることは全体、最期の話し合いは全体、男性、女性、運動習慣は全体、男性、女性で有意な正の影響、また孤独感は全体、男性、女性、うつの疑いは女性において有意な負の影響がみられた(全体R²=.439,男性R²=.454,女性R²=.466)。

(4) レジリエンスを使用した分析例

フレイルは適切な介入により回復し、軽度な移動制限が生活に及ぼす負の影響をレジリエンスが緩和するという報告を参考にすると、レジリエンスはフレイルからの回復やフレイル予防において、効果的に働く可能性が考えられる。このことを踏まえ本研究では、非フレイルに影響を与える要因に関して、独立変数にレジリエンスを入れないモデル(モデル1)と入れたモデル(モデル2)の比較により検討した。インターネット調査(上記参照)における適格者(n=380)を対象に分析した。項目は、フレイル、レジリエンス、運動習慣、うつの疑い、脳卒中などの疾病経験、人口学的要因は、性別、年齢、教育年数、世帯人数だった。フレイルの測定に使用する後期高齢者の質問票は、G-P (Good-poor)分析により全項目に有意差を示し、本研究の対象者に利用可能であることを確認した。X²検定、Fisherの直接法あるいはt検定を行い、フレイル・非フレイルに対する独立変数の関係の傾向を把握したのち、多重ロジスティック回帰分析を行った。分析の結果、モデル1では、運動習慣、教育年数の非フレイルへの有意な正の影響、うつの疑い、男性の有意な負の影響を示した。モデル2において、レジリエンスは有意な正の影響を示し、またモデル1において有意な影響のあった要因全てにおいて、オッズ比は低くなったが有意なままだった。レジリエンスの存在意義のある分析例を示すことができた。

1. 研究課題

植物の香りが高齢者の心身の健康指標に及ぼす効果

2. 研究活動の概要

嗅覚は日常生活に重要な感覚であり、嗅覚障害は生活の質を低下させるだけでなく、軽度認知障害、神経変性疾患、特にパーキンソン病やアルツハイマー病の初期症状の可能性があると考えられている。また嗅覚機能障害は身体健康、生活の質、栄養状態、および日常の安全に大きな影響を与えるだけでなく、死亡率の増加にも関連している。

2011-2012年米国国民健康・栄養調査（National Health and Nutrition）結果では、自己申告による嗅覚変化の有病率は23%で、有病率は年齢とともに徐々に増加し、80歳以上で最も高かった（嗅覚32%、味覚27%）。2015年Johannes Attemsらによる報告では、65～80歳は50%、80歳では62～80%に嗅覚機能の低下が存在するとされている。

以上の研究からも高齢者の嗅覚への注目度は高く、嗅覚の維持の重要性は明らかであるが、現在、加齢に伴う嗅覚低下に対して積極的な治療法はない。しかし禁煙とともに適度な運動が嗅覚低下の予防につながる可能性があるという研究結果がある。また近年、欧州を中心に嗅神経性嗅覚障害に対する治療法として有効性が示されているolfactory training が挙げられる。このトレーニング法は、バラ、ユーカリ、レモン、丁子の4種類のにおい液を染み込ませた綿をガラス瓶に入れ、毎日朝晩の2回、それぞれの匂いを10秒ずつ嗅ぐというものであり、4か月以上の治療で有意な改善を示したと報告例がある。高齢者に対しても4か月間トレーニングを行い、嗅覚の改善は得られなかったものの、嗅覚低下を予防することができたとの報告がある。加えて、嗅覚低下予防にはアロマセラピーも有効とされ、特にアルツハイマー患者の認知機能を改善する可能性があることも報告されている。

しかし植物を利用するolfactory trainingやアロマセラピーに対し、園芸療法やフラワーアレンジメント等の植物を介した分野においては、嗅覚の重要性を示唆する研究はあるが、園芸作業と嗅覚の関係性といった研究は見当たらない。

本研究では、植物の匂いの効用を利用したフラワーアレンジメント作業が、高齢者の認知機能、抑うつ等の気分状態、睡眠の質や睡眠時間等に及ぼす効果を明らかにする。

3. 研究業績

【論文】

佐々木華香, 渡辺修一郎. フラワーアレンジメントがデイサービス利用高齢者の精神的健康状態に及ぼす効果－日本語版WHO-5 精神的健康状態標を指標として－.

応用老年学. 2022; 16(1): 99-107.

【その他の研究活動】

主な講義

- 1) 介護予防の理論と実践－芸術を活かした介護予防－（桜美林大学健康福祉学群 2022年12月20日）
- 2) フローラルセラピスト養成講座（日蘭フローラルデザイナーズ協会）

1. 研究課題

生活支援コーディネーターによる地域づくりへの取り組み

2. 研究活動の概要

生活支援体制整備事業を担う生活支援コーディネーター(以下、SC)による地域づくりの特徴を他の地域づくり関連事業との違いに着目した。

対象は、東京23区のSCまたはSCを支援する担当者13名である。質問内容は、他の事業との違いをどのように意識して取り組んでいるかであり、分析は、質的記述的研究で行った。

結果は、【住民目線からのニーズ把握】 【地域のあらゆる相談を受けとめる窓口となる】 【メンバー間の情報共有に努める】 【多種多様なメンバー構成】 【様々な社会資源を活用して課題解決】 【住民の主体的な取り組みが基盤】 の6カテゴリーが生成された。

以上、SC活動の特徴は、①整備事業が既存の住民の主体的活動を基盤としている、②高齢者を主な対象としつつも全年齢層が抱える問題に対応している、③協議体のメンバー間では問題解決の手段として連携を追求している、ことが示唆された。

3. 研究業績

【論文】 査読付き

柴崎雄悟, 杉澤秀博. 大都市における生活支援コーディネーターの地域づくりへの取り組みに関する質的研究. 老年学雑誌, 12, 1-14.

1. 研究課題

農村在住後期高齢者の精神的健康に及ぼす要因

2. 研究活動の概要

農村において地域活動を担っていた高齢者の人口は、2025年より減少に転じる見通しであることから、農地等の資源やコミュニティの維持が困難となることが懸念される。昨今の感染症蔓延や災害時における、行動や社会参加の制限などが、高齢者の精神的健康に影響を与える恐れがある。

修士課程では、COVID-19の予防のための外出や社会参加などの活動自粛が、農村在住後期高齢者の精神的健康の変化にどう影響するかを検討した。その結果、WHO-5J得点は、COVID-19による外出の減少（2020夏）および、暮らし向きがよくないこと（2019）により有意に低下した。今後は、農村でのCOVID-19感染予防のための活動自粛が、経済状態の変化にどのように影響し、精神的健康度に関連するか研究を発展させていく。

3. 研究業績

【科研費などの助成金】

- 1) 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））：地域在住高齢者の口腔機能向上を目指した呼気筋トレーニングプログラムの確立（分担研究者）

1. 研究課題

- (1) 降圧剤服用の有無が高年齢者の入浴中の収縮期血圧の変動に及ぼす影響
- (2) 高年齢者における入浴中の傾眠調査
- (3) ゴルフ場ウォーキングによるストレス軽減効果の検討

2. 研究活動の概要

- (1) 入浴実験 (60～80代・男性20名/湯温39℃、41℃)
- (2) 冬場の入浴アンケート調査 (50～90代・男女200名)
- (3) ゴルフ場ウォーキングと市中ウォーキングのストレス比較実験 (60～80代・男女10名)

3. 研究業績

【番組制作および出演】

- 1) 安全入浴に関する講演 (本庄市、2022/05/11)
- 2) 夏場の入浴法解説 (週刊文春、2022/07/14)
- 3) 安全入浴に関する講演 (四谷図書館、2022/11/14)
- 4) 安全入浴に関する講演 (本庄市、2022/11/26)
- 5) 高齢者安全入浴10か条解説 (BuzzFeed News、2023/01/05)
- 6) 冬に起きやすい高齢者の入浴中死亡事故解説 (2023/01/15)
- 7) 高齢者の入浴事故解説 (BSよしもと、2023/01/25)
- 8) ヒートショック対策解説 (富山テレビ、2023/02/02)
- 9) 高齢者安全入浴の日解説 (富山テレビ、2023/02/04)
- 10) 安全入浴に関する講演 (朝霞市、2023/02/07)
- 11) 安全入浴に関する講演 (秩父郡横瀬町、2023/02/10)
- 12) 安全入浴に関する講演 (本庄市、2023/02/16)
- 13) 安全入浴に関する講演 (盛岡市、2023/02/18)

1. 研究課題

介護家族への支援についての研究

2. 研究活動の概要

介護家族への支援についての研究

1) 別居介護を継続していくプロセス

前年度に引き続き、別居介護をおこなっている介護者へのインタビュー調査を実施した。今年度は認知症の人の家族介護者を中心にインタビューを行い、別居介護を継続していくプロセスを明らかにした。また、在宅での別居介護から施設入所への選択をした家族介護者にもインタビューを行い、施設入所に至った経緯を聴取することで、別居介護の限界点を明らかにする。この調査は現在継続中である。

2) 別居介護の介護負担感について

別居介護者へのインタビュー調査から、介護者が抱いている別居介護の介護負担感を構成する要因として、【すぐに対応できない不安】 【生活が別であることの煩わしさ】 【通い続ける消耗感】 【介護をめぐる関係性への苦悩】 【別居介護選択へのゆらぎ】 の5つの要因を明らかにした。前述の別居介護のプロセスとともに論文執筆に向けて準備を進めている。

3. 研究業績

【学会発表】

関野明子, 涌井智子. COVID-19流行下における別居介護継続に寄与する不安要因に関する質的研究. 2022年7月2-3日、日本老年社会科学会第64回大会, 東京

【科研費などの助成金】

公益財団法人SOMPO福祉財団ジェロントロジー研究助成 (代表研究者)

1. 研究課題

- (1) 高齢者における主観的な学習ニーズと実践に関する研究：測定指標の開発と関連要因の解明
- (2) 認知症の患者におけるコミュニケーション障害評価
- (3) 中高年の就労者におけるテレワーク実践の関連要因

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者における主観的な学習ニーズと実践に関する研究：測定指標の開発と関連要因の解明本研究の目的

第1の目的は、学習領域別に高齢者における主観的な学習ニーズと学習実践の評価指標をそれぞれ作成すること、第2の目的は、作成した評価指標を利用し、高齢者の主観的な学習ニーズと実践のギャップの大きさを学習領域別に明らかにすること、第3の目的は、作成した評価指標を用いて、高齢者における主観的な学習ニーズの出現およびその実践への移行に関連する要因を明らかにすることである。

以上の3つの課題の関連は次の通りである。本研究の実践課題は、学習ニーズと実践とのギャップの克服にある。そのためには、ニーズと実践とのギャップが生じる要因、すなわち学習ニーズの出現とその実践への移行に関連する要因を解明する必要がある。しかし、その前提としては、ギャップの存在をきちんと明らかにすることが必要となるが、学習ニーズと実践を評価する指標が開発されていない。以上のような制約の中で、本研究では、第1ステップとして、妥当性と信頼性が確保された主観的な学習ニーズと実践の評価指標を開発した。次いで第2ステップとして、開発した指標を活用し、学習ニーズと実践とのギャップを明らかにした。最後に第3ステップとして、ニーズと実践とのギャップが生じる要因、すなわち学習ニーズの出現とその実践への移行に関連する要因を解明した。

主な知見

I 高齢者の主観的な学習ニーズ・実践の評価に関する研究

北千葉地域住民を対象として、共通する項目を用いて高齢者における主観的な学習ニーズを「必要性の認識」と「興味」の側面から評価するとともに、それに対応する学習経験の評価指

標も作成した。それぞれ評価指標は、「一般的学問」「高齢者における日常生活の課題」「ICT技能」「人生の振り返り」という4次元が抽出された。

II 高齢者における主観的な学習ニーズと実践とのギャップ

まず東京都下の町田市に在住の60歳以上の住民から無作為に抽出した516名を対象として、無記名の自記式調査票を用い、郵送法によって行った。調査票の配布は2020年1から2月まで行った。回収された調査票は273であった。桜美林大学の研究倫理委員会の承認を得た。

高齢者における主観的な学習ニーズと実践とのギャップについて、「高齢期における日常生活の課題」の次元のニーズが主観的な学習ニーズの平均よりも有意に高かった。「ICT技能」「一般的学問」「人生の振り返り」という次元は、いずれも主観的な学習ニーズの全体平均より有意に低かった。

III 高齢者における主観的な学習ニーズの出現とその実践への移行に関連する要因

対象と調査方法と倫理的配慮は「高齢者における主観的な学習ニーズと実践とのギャップ」に共通した。

健康行動変容理論を踏まえ、高齢者における主観的な学習ニーズの自覚の関連要因の結果では、老後に向けての準備への努力している高齢者、学習効果への認知が高い高齢者で、主観的な学習ニーズの出現が有意に高かった。

ニーズの出現から実践への移行に関連する要因の分析結果を示した。家族・友人が高齢者の学習に対して好意的・支援的であることが有意な効果を持っていた。

本研究の意義と提言

I 主観的な学習ニーズ・実践の評価指標の活用

まず、従来学習プログラムの設定の視点からみると、本研究では、学習活動を実施していない高齢者をも対象として高齢者の主観的な学習ニーズの評価指標を開発するとともに、それと対となる学習実践の評価指標をも併せて開発した。本研究で開発した指標を用いることで、高齢者における主観的な学習ニーズと学習実践とのギャップを明確に把握することができることから、高齢者の学習を推進することの一助になると思われる。

II 高齢者の主観的な学習ニーズの合致した教育内容の提供

高齢者の主観的な学習ニーズについては、「高齢期における日常生活の課題」という次元の学習ニーズが最も多く、実践とのギャップが大きい次元も、この次元であることが明らかにされた。「人生の振り返り」の課題については、他の次元と比較して学習ニーズは高くないものの、実践とのギャップが大きかった。前期高齢者と後期高齢者との比較でも、「ICT技能」の次元を除き、この傾向に違いがなかった。今後、高齢者に向けた学習プログラムは、後期高齢者も含め、従来の「教養」系に加えて高齢期における学習ニーズに合致する「高齢期における日常生活の課題」や「人生の振り返り」を位置付けることが必要である。

Ⅲ 高齢者における学習の促進策

高齢者の学習に関する研究領域においては、主観的な学習ニーズの喚起から実践までを視野に納めつつも、それぞれを変容ステージに区分し、それぞれのステージごとに介入の在り方が異なることを指摘した研究はほとんどない。分析の結果、主観的な学習ニーズがない状態からニーズの出現へのステージ変容の段階には、老後に向けての準備への努力、学習効果への認知が関連していること、ニーズの出現から実践へのステージ変容の段階には、家族・友人が高齢者の学習に対して好意的・支援的であることが関連していることが明らかにされた。すなわち、主観的な学習ニーズがない状態からニーズの出現、ニーズの出現から実践という2つのステージの区分ではあるが、それぞれの段階への変容には介入方法を異にすることが必要であることが示唆された。

主観的な学習ニーズがない状態からニーズが出現するように変容させるには、老後生活準備に取り組む、すなわち、想定される老後の問題とその解決のために何が必要かを考える機会を提供することが重要である。台湾では、中高年を対象として老後の生活設計を立てるよう奨励している。日本でも台湾と同じように老後の生活設計を立てるよう促すことが主観的な学習ニーズの喚起につながる可能性が示唆された。同時に、本研究の結果から、学習活動の効果について理解が進むような機会を高齢者に提供することもニーズの出現に有効であることが示唆された。中国・台湾においては、高齢者の学習活動を促すために本人のみならず周りの家族と友人に対しても学習のメリットに関する情報を積極的に伝えることを提唱している。日本においても、このような施策が重要であることが示唆された。

さらに、日本では、高齢者の学習への支援は、「生涯学習の環境の整備」「学習情報の提供」「学習機会の拡充」を柱に進められてきている。「生涯学習の環境の整備」については、高齢者が利用しやすいように施設のバリアフリーなどへの取り組みが行われてきた。「学習情報の提供」については、広報紙の発行とともに、公共施設をはじめとして、駅、スーパーマーケット、商店街などでポスターの掲示やチラシの配布をしてきた。各市町村の生涯学習センターにおいて学習相談窓口も開設されてきた。「学習機会の拡充」については、高齢者大学の設立、NPO団体、図書館、市民大学などの連携による教育ネットワークの構築が行われてきた。さらに様々な学習プログラムも開発されてきている。最近では、ICT技術を活用してオンライン学習も進められている。しかし、それぞれの施策が高齢者の現実の学習活動にどの程度有効であるかほとんど検討がなされていない。本研究では、「生涯学習の環境の整備」については、学習環境充実度という指標を用いて、その効果を見てみた。分析の結果、学習環境充実度が学習ニーズの喚起、ニーズから学習実践への移行のいずれにも有意な影響はみられなかった。「学習情報の提供」については、家族や友人という高齢者の身近なネットワークがニーズの出現後の学習実践への移行に有意な効果があることが示された。以上のことから、高齢者の間に学習ニーズを喚起し、学習実践を活発化されていくには、以下のような取り組みが必要であることが明らかにされた。①学習参加者による学習プログラムの企画および参加者のインフォーマルなネットワークを活用した参加の呼びかけ、②若い世代も含めた全世代型の共学ができるようなプログラムの構築。

(2) 日本認知症の患者におけるコミュニケーション障害評価

高齢化が最も進んでいる国のひとつである日本は、近年認知症の患者が増加し、高齢患者の割合が高い。1980年代以降、日本は認知症コミュニケーション障害の効果的な評価方法を模索し、対応策を策定しており、これまでのところ、日本は認知症コミュニケーション障害の評価、診断、治療の先進国になった。本研究では、日本における認知症患者に向けて談話・会話分析、認知症患者のコミュニケーション障害の型別評価、臨床診断の総合評価の応用とその効果を分析し、それぞれの研究成果は、中国の認知症患者の介護サービスにおけるコミュニケーションの支障という問題を解決するため参考になると期待されている。

(3) 中高年の就労者におけるテレワーク実践の関連要因

本研究の目的は、「社会的認知理論」を踏まえ、中高年者におけるテレワーク実践の関連要因を明らかにすることである。

調査対象は、全国に在住の18歳以上の正社員472名を対象に、自記式調査票を用いてオンライン調査を行った。分析ケース数は50歳以上の160票であった。

結果では、テレワーク実践の「認知要因」について、中高年の就労者は、仕事の自己効力感とICT介入した仕事への結果予期が、テレワークの実践に影響がなかったことが明らかにされた。

テレワーク実践の「環境要因」について、企業におけるテレワークの実施「規範信念」は中高年者のテレワークの実践に影響がなかったことが明らかにされたが、「機会と阻害」はテレワークの実践に対する有意的な影響があったと示唆された。テレワーク実践の「行動要因」では、行動スキルが高い人は、テレワークを実践していることが分かった。一方、組織的公正を感じていない人は、テレワークを実践していることがわかった。本研究の結果を踏まえ、中高年の就労者のテレワークを促すことは、組織の労働環境の整備が重要であることが示唆された。

3. 研究業績

【著書】

「日本における認知症患者のコミュニケーション障害評価」という一文は、『高齢者言語学新発見』（黄立鶴，編）の第29章に収録された，同済大学出版社（2022.8.）

【論文】 査読付き

孫潔，杉澤秀博. 2022. 高齢者における主観的な学習ニーズと実践に関する研究：関連要因の解明. 応用老年学, Vol16. 10-22.

【学会発表】

- 1) 孫潔, 杉澤秀博. 高齢者における学習に対する「興味」の関連要因. 日本老年社会科学会第64回大会. 東京. 2022.7.
- 2) 孫潔. 中高年の就労者におけるテレワーク実践の関連要因. 日本応用老年学会第17回大会. 九州. 2022.11.
- 3) 孫潔, 杉澤秀博. 高齢学習者による「話し合い学習の理解」を妨げる要因. 日本老年社会科学会第65回大会. 東京. 2023.6. (予定)

【その他の研究活動】

- 1) 慶応義塾大学2040独立自尊プロジェクト健康寿命延伸プロジェクトに参加し, 「グローバル高齢化時代と健康寿命の未来～現在地とこれから～」 「健康は誰の手に渡るのか～グローバル高齢化の観点をふまえて」などのシンポジウムの企画に参加した.また, 中国における『高齢社会対応の国家戦略』実施の現状に関する Working Paperを執筆している.
- 2) 老年学ECRネットワークに参加し, 企画委員担当.

1. 研究課題

女性定年退職者の生活と考え方

2. 研究活動の概要

<情報収集>

雇用平等法施行後の女性が定年退職年齢になり、女性定年退職者数増加し、社会的な背景はかなり変化している。

調査報告、文献など情報もふえている。

(1) 所属関連団体からの情報収集

老年社会科学会、

日本応用老年学会

高齢社会をよくする女性の会、

シニア社会学会、

定年女子トーク実行委員会 フォーラム参加

(2) 既存関連調査（官庁、民間）の情報収集

(3) 杉澤ゼミ聴講（zoom）

1. 研究課題

- (1) 高齢者がレクリエーションダンスを行なう効果
- (2) 台湾原住民における高齢者の位置づけと役割

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者がレクリエーションダンスを行なう効果

コロナ感染環境変化のため、集合活動の自粛・施設の閉鎖などが緩和の方向にあり、対象の団体を絞って調査を継続した。現在、①マスク使用とアルコール消毒による従来通りの活動、②オンライン利用による活動、③集合人数を制限して実施、④集合の案内を出す、コロナ感染者増大により中止することが多い、などの特徴があり、団体により徐々に取り組み方法の工夫や変化が見られた。組織存続の観点から興味深いと考えられた。

(2) 台湾原住民における高齢者の位置づけと役割

フィールドワークを計画しており、台湾への入国が緩和されて来たため2023年度の予備調査を企画した。台湾文化センター（虎ノ門）が隔週開催する台湾原住民舞踊講座に参加し、阿美族、卑南族の言語について情報収集を行なった。一方、台湾在住の研究者との情報交換により、「長老」の役割が明確に表れる祭祀について、2023年度はほぼ例年通りに射耳祭、海祭、豊年祭、年祭等が実施されることが分かった。さらに台湾中央研究院とのコンタクトが取れた。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

高齢者対象福祉施設の活動に定期的参加（多摩ニュータウン）

1. 研究課題

- (1) 高齢者に対する「聞き書き」による介入の方法と効果に関する研究
- (2) 住民の地域活動に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者に対する「聞き書き」による介入の方法と効果に関する研究

昨年度に引き続き、高齢者に対する「聞き書き」に関する研究を継続している。大学での授業にて、高齢者の方のお話を聞き、学生による「聞き書き」を実施した。

(2) 住民の地域活動に関する研究

担い手の高齢化により活動の継続が困難な状況について、世代間継承の方法を探り、活動の継続と継承について、文献研究や情報収集を行っている。地域活動団体へのグループインタビューを実施予定である。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

大学で高齢者の方の「聞き書き」に関する授業を実施

1. 研究課題

- (1) デスカフェ参加による死生観の変化とACP実践の準備性
- (2) 施設における看取りケアのための専門職へのデスエデュケーションの探索
- (3) 企業活動における老年学の応用に関する啓発・普及

2. 研究活動の概要

(1) デスカフェ参加による死生観の変化と ACP 実践の準備性

- 1) 昨年度実施した<ACP準備教育としてのデスカフェの機能>を探るフォーカス・グループ・インタビュー（若年20～30代、中年40～50代、高年60代以上をほぼ均等に分けた4グループ・24人を対象）のデータ分析中。
- 2) 板橋区高島平地区在住の中高齢者を対象に、課題（1）の介入調査を実施中。
60代～90代を中心とした住民40名（同地区チラシのポスティングや関係機関におけるチラシ掲示にて募集）を前半・後半2つに分け、各5カ月ずつ月に1度、計10か月にわたる介入デスカフェを実施中。前半・後半それぞれにデスカフェ開始前と終了後のアンケートを実施し、死生観の変化とACPの準備性についてクロスオーバー解析を行う予定。

(2) 施設における看取りケアのための専門職へのデスエデュケーションの探索

東京都健康長寿医療センター研究所・福祉と生活ケア研究チームの「エンドオブライフケア」研究に協力参加し、小規模多機能施設における看取りのためのデスエデュケーションプログラムの探求と、対話によるデスカフェ機能の有用性を聞き取るインタビュー（デスカフェ主催者17人）の共同実施。

(3) 企業活動、および市民活動における老年学の応用に関する啓発・普及

- 1) 日本応用老年学会が主催する「ジェロントロジー検定試験」の企業内団体受験の促進に努め、顧客のウェルビーイング実現のサポートを目指す企業理念に、老年学の基礎知識の浸透を目指す。2022年度は生命保険会社が2,000人を超える従業員の団体受験により、企業内の老年

学修得の機会を設けた。

- 2) 企業連携による研究会の運営等を通じて、老年学概念への理解を深め、これらの企業活動のコンセプト開発に老年学を活かす道を模索検討する。2022年度は金融機関と住宅産業を老年学者による研究会を継続し、本邦初「住まいの老年学」を提案する書籍を開発中である。
- 3) 「ジェロントロジー検定試験」を通して習得した老年学の基礎知識を、市民活動に活かす人々の実態調査を行い、活動報告する場を提供。活発化する個々の市民活動のスピリッツに老年学が芽吹くことで市井の老年学の確立を目指す。2022年は日本応用老年学会第16回大会においてシンポジウムを企画し、老年学を学んで市民活動を続けている人々のインタビュー動画を発表した。

3. 研究業績

【学会発表】

「社会的実装を意識した老年学教育の視点から『仕事にも生活にも、老年学を活かすために』」第64回日本老年社会学会大会・シンポジウムⅡ. 2021.7.2

【その他の研究活動】

- 1) 京都女子大学家政学部生活福祉学科総合演習
2022年7月13日（吉川ゼミ）「少子高齢化社会のケアとヤングケアラー」を講義
- 2) 女子栄養大学栄養学部・実践学科「保健学総論 第14回」
2022年7月21日（実践AB）「デスカフェ（死について考える）」を講義
- 3) 女子栄養大学栄養学部・実践学科「公衆衛生学Ⅰ」
2022年12月19日、2022年12月23日、2023年1月10日（実践CDおよび食文化クラス）において、「エンド・オブ・ライフとACPとデスカフェ」を講義
- 4) 看取りケア・アドバイスツール編集制作
「施設で認知症の人を家族と看取るための、三つの物語」（井藤佳恵、小野真由子ほか）
「これから死を迎えるためのデスエデュケーション～対話型のデスエデュケーション・プログラム～」（井藤佳恵、小野真由子ほか）
- 5) 日本応用老年学会第17回大会・シンポジウム4企画運営
上記学会のジェロントロジー啓発活動として、シンポジウム「社会におけるジェロントロジーの活用報告」を企画運営、ジェロントロジー・マイスターの活動報告インタビューやビデオ制作等を行い、学民連携のジェロントロジー活用の拡大に取り組む。
- 6) 企画制作：住まいと住まい方のジェロントロジー研究会成果物
公益財団法人トラスト未来フォーラム主催、慶応義塾大学理工学部教授（建築学）を座長に、三井住友信託銀行・日本応用老年学会・竹中工務店ほかにより、約2年間にわたって継続開催した産学連携研究会の成果物として、本邦初の“住まいのジェロントロジー”書籍を制作中

1. 研究課題

- (1) 独居高齢者の配偶関係からみた類型が高次生活機能および精神的健康状態に及ぼす影響
- (2) 認知症高齢者のQOLと環境との関連

2. 研究活動の概要

- (1) 独居高齢者の配偶関係からみた類型が高次生活機能および精神的健康状態に及ぼす影響

独居高齢者の配偶関係からみた類型と精神的健康状態および社会的役割との関連。
独居高齢者の健康に関する検討に参与した。

- (2) 認知症高齢者のQOLと環境との関連

認知症高齢者のQOLと環境との関連
ユニット型特養の入所者のより良いケアに影響のある、環境アセスメントツールの日本語訳に関わった。

3. 研究業績

【論文】

Validation of the Japanese version of the quality of life-Alzheimer' s disease for nursing homes.
Brennan,S., Doan,T., Osada,H., & Hashimoto,Y. Aging & Mental Health, 27(2)
281-291.<https://doi.org/10.1080/13607863.2022.2076209>

【その他の研究活動】

専門学校における、1学年（昼間部・夜間部）科目：栄養指導および3学年（昼間部・夜間部）国家試験対策において、老年学分野を含む講義を行った。

特に高齢期における栄養指導について：

- ・高齢者の身体の変化（嚥下機能低下、味覚細胞の減少など）

・介護食品（スマイルケア食など）

・フレイル（低栄養と予防など）

2022年前期、後期

1. 研究課題

- (1) 高齢者のQOLと社会貢献の向上に資する研究
- (2) 大衆長寿社会に求められる公共政策研究
- (3) 大衆長寿社会における老年学の普及、啓発

2. 研究活動の概要

(1) 高齢者のQOLと社会貢献向上に関する研究

産学公民連携によるフィジビリティ・スタディの推進

(2) 大衆長寿社会に求められる公共政策研究

QOA座標軸研究 (Quality of Aging/健康長寿座標二次元モデル)

地域公益活動団体・地方自治体を基盤とする新たな連携モデル

(3) 大衆長寿社会における老年学の普及、啓発に資する研究

高・大連携による「エイジング論」の共通科目化研究

集合住宅「二つの老い」問題対策

3. 研究業績

(1) 公共政策プロジェクト

複合型コミュニティカフェ/プログラム・オフィサー

集合住宅「二つの老い」問題対策

(2) 主な講演、講義

死生観醸成と「老い」の受容 (高齢者福祉施設研修)

グリーンケアに求められる老年学知見 (葬祭事業者研修)

マンション管理に活かす老年学視点 (マンション管理士団体)

1. 研究課題

後期高齢者における椅子立ち上がりテストと生活動作との関係

2. 研究活動の概要

修士論文では、後期高齢者の10秒椅子立ち上がりテストと大腿四頭筋筋力との関係について、椅子立ち上がりテストの計測値と筋力との関連を検討してきたが、生活動作との結びつきについて検討していく必要性を感じており、椅子からの立ち上がりテストを用い、後期高齢者を対象とした調査を継続して行く。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 千葉県理学療法士会学術局主催研修会の企画運営
- 2) 千葉県理学療法士会学会運営協力
- 3) 理学療法士講習会運営協力
- 4) 千葉県理学療法士会地域包括ケアシステム推進リーダー研修会運営協力
- 5) 「専門リハビリテーション研究会誌」編集協力
- 6) 専門リハビリテーション研究会研修大会企画運営

1. 研究課題

- (1) ユニット型特別養護老人ホームの施設環境と認知症利用者の生活の質に関する研究
- (2) 環境尺度Environmental Assessment of Tool-High Careの諸言語版作成者らと共同研究
- (3) 看護学生のエイジズムについての意識調査研究
- (4) 2型糖尿病マイノリティ民族患者と家族調査研究

2. 研究活動の概要

(1) ユニット型特別養護老人ホームの施設環境と認知症利用者の生活の質に関する研究

ユニット型特別養護老人ホームの入所者の生活の質を高めるための環境支援尺度として、日本版Environmental Assessment of Tool-High Care (J-EAT) を作成。妥当性の検証と論文執筆。信頼性調査については、現地調査が可能になり次第実施予定。

(2) 環境尺度 Environmental Assessment of Tool-High Care (EAT-HC) の諸言語版作成者らと共同研究

ドイツ、シンガポールのEAT-HC研究者らとcross-cultural adaptationの共同研究。論文執筆および学会発表。

(3) 看護学生のエイジズムについての意識調査研究

看護学生の高齢者に対する意識調査を行う研究員として、米国、日本、中国の看護学校のカリキュラムにライフレビュー課題を組み込み、学生のエイジズムについて文化、環境、個人のバックグラウンドから考察、看護カリキュラムの見直し支援。論文執筆および学会発表。

(4) 2型糖尿病マイノリティ民族患者と家族調査研究

2型糖尿病の米国系フィリピン人と中国人の65歳以上の親とその成人子のペア調査結果の分析、論文執筆。マイノリティ民族の糖尿病に対する知識や意識、文化背景、家族サポート、医療体制について問題提起。論文執筆および学会発表。

3. 研究業績

【論文】

- 1) Doan, T., Brennan, S., Kulik, C., & Yoo, G. (2023). The role of filial piety in dyadic recruitment of Chinese American parents with type 2 diabetes and their adult children. *Journal of Transcultural Nursing* (印刷中)
- 2) Brennan, S., Doan, T., Osada, H., & Hashimoto, Y. (2023). Validation of the Japanese version of the quality of life-Alzheimer' s disease for nursing homes. *Aging & Mental Health*, 27(2), 281-291. <https://doi.org/10.1080/13607863.2022.2076209>
- 3) Fahsold, A., Brennan, S., Doan, T., Sun, J., Palm, R., Verbeek, H., & Holle, B. (2022). Adapting the Australian Environmental Assessment Tool—High Care (EAT-HC): Experiences and practical implications from Germany, Japan, and Singapore. Published online September 1, 2022. *Health Environments Research & Design Journal*. <https://doi.org/10.1177/19375867221122936>
- 4) Brennan, S., Doan, T., Sun, J., & Fahsold, A. (2022). Three-nation comparison of content validity of the Environmental Assessment Tool-Higher Care. *Journal of Aging and Environment*. Published online July 4, 2022. <https://doi.org/10.1080/26892618.2022.2092930>

【学会発表】

- 1) Kulik, C., Brennan, S., & Doan, T. (2023, March). Life Review as a teaching method in palliative care education for undergraduate nursing students. Poster presentation at the 2023 National Symposium for Academic Palliative Care Education and Research, Long Beach, CA, USA (予定).
- 2) Fahsold, A., Brennan, S., Doan, T. & Sun, J. (2022, June). Comparison of content validity of the Environmental Assessment Tool -Higher Care (EAT-HC): Lessons learned from Germany, Japan, and Singapore. Oral-poster presentation at the 6th edition of the Nursing Home Research International Conference, Toulouse, France.

【その他の研究活動】

Residential Care for the Elderly Administrator Certification (カリフォルニア州高齢者福祉施設管理者免許) 維持にあたり, 高齢者介護施設の運営 (法律, POLST) および認知症ケア (パーソン・センタード・ケア, BPSD, 薬物管理, LGBT, 余暇活動, 終末期医療, 虐待, 救急応答等) について20時間の講習に参加.

1. 研究課題

- (1) シニアマーケット研究
- (2) 高齢者の安全・安心に関する研究

2. 研究活動の概要

(1) シニアマーケット研究

- ・シニアマーケット関連の調査、設計、実施、報告
- ・高齢者をメインターゲットとする商品・サービスに関する市場調査、及び企画一式（調査設計・実査・分析・報告等）
- ・高齢者の行動調査の設計、実施、分析、等
- ・高齢者施設における実証研究
- ・コミュニティ形成に関する研究

(2) 高齢者の安全・安心に関する研究

- ・警察政策学会・日本市民安全学会での研究会に参加
- ・日本市民安全学会 毎月行われる研究会に参加
- ・市町村・企業・学会等、依頼講演による啓蒙活動等

3. 研究業績

【著書】

- 1) 堀内裕子, (連載) 発見「いいもの・いいこと」見つけてきました
TECHNOプラス 福祉介護 日本工業出版社
No.147 4月号 シニアマーケット～With・Afterコロナ～Ⅰ
No.148 5月号 シニアマーケット～With・Afterコロナ～Ⅱ
No.149 6月号 シニアマーケット～With・Afterコロナ～Ⅲ
No.150 7月号 シニアマーケット～With・Afterコロナ～Ⅳ
No.151 8月号 シニアマーケット～With・Afterコロナ～Ⅴ
No.152 9月号 「更年期Ⅰ～フェムテック～

- No.153 10月号 更年期Ⅱ～女性～
No.154 11月号 更年期Ⅲ～男性～
No.155 12月号 毎年恒例「百寿者」過去最高 2022年 I
No.156 1月号 毎年恒例「百寿者」過去最高 2022年 II
No.157 2月号 毎年恒例「百寿者」過去最高 2022年 III
No.158 3月号 高齢者の就労を考える I

【論文】

堀内裕子, With・Afterコロナのシニアマーケット, 日本市民安全学会機関紙, 第20回大会記念号, 論壇

【その他の研究活動】

1) 講義・講演他

- ①2022年5月 品川区役所 品川シルバー大学
「高齢期の住まいと安全～正常老化への対応～」
- ②2022年7月 品川区役所 品川シルバー大学
「シニア世代の防犯・特殊詐欺から身を守る」
～高齢期の特徴を踏まえ～
- ③ 2022年6月 ニューマーケティング協会
～ ニューノーマル時代のシニアマーケット ～
「“シニア5000万人時代を考える”～新市場の創造」
- ④2021年7月 立教大学セカンドステージ
「老年学視点からのシニアマーケット分析」
- ⑤2022年11月 日本市民安全学会
「漂流遺産について」

1. 研究課題

- (1) 認知症高齢者の終末期医療・ケアを代理意思決定する家族への看護支援
- (2) 患者中心の臨床試験の実現に向けた臨床研究コーディネーターと臨床看護師の協働

2. 研究活動の概要

(1) 認知症高齢者の終末期医療・ケアを代理意思決定する家族への看護支援

本研究の目的は、認知症高齢者の代理意思決定に関する日本における研究動向と課題の整理（課題Ⅰ）、看護師の代理意思決定支援と看護支援に対する家族の受け止め・評価の相違（課題Ⅱ）、代理意思決定に対する家族の満足度に関連する要因（課題Ⅲ）の3課題の解明を通じて、意思が確認困難な認知症高齢者の終末期医療・ケアに関する家族の代理意思決定を支える看護のあり方について検討・提言することである。

各課題の研究成果は学術誌に掲載されており、このうち、認知症高齢者の家族を対象とした質的研究において令和3年度日本老年看護学会研究論文奨励賞を受賞している。本年度は、第27回学術集会において受賞者講演を行った。

(2) 患者中心の臨床試験の実現に向けた臨床研究コーディネーターと臨床看護師の協働

昨年度は、日本における臨床研究看護についての文献研究の成果を学会発表した。本年度は、DIPEX-Japanが管理・運営している「語りのアーカイブ」に収録されている参加患者らの「臨床試験・治験の語り」データの二次分析を進めた。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 大村知広, 小田切圭一, 中村美詠子, 鈴木千恵子, 牧野公美子, 乾直輝, 梅村和夫: 非臨床研究中核病院へのQuality by Design進捗度調査で判明した研究計画書の科学的妥当性のレビューと人的リソースの関連性, 第6回日本臨床薬理学会 東海・北陸地方会 (2022年7月30日), WEB.

- 2) 大村知広, 小田切圭一, 中村美詠子, 鈴木千恵子, 牧野公美子, 乾直輝, 梅村和夫: 非臨床研究中核病院を対象としたQuality by Designの実装調査 - Quality by Designの実装における医師、PMの重要性と支援リソースを補完する手順書の作成, 第43回日本臨床薬理学会学術総会 (2022年11月30-12月3日), 横浜.
- 3) 秋元美佐枝, 牧田美佳, 牧野公美子, 五十公野由起子, 佐藤直美: 臨床看護師及びCRCを調査対象とした臨床試験に関する国内研究の動向と概要, 令和4年度浜松医科大学医学部附属病院看護研究会 (2023年2月18日), WEB.

【その他の研究活動】

1) 研究論文賞受賞者講演

牧野公美子: 施設内看取りを代理意思決定し看取る過程で家族が経験した精神的負担と代理意思決定に対する思い, 日本老年看護学会第27回学術集会 (2022年6月25日-7月25日), オンデマンド配信.

2) 国立研究開発法人日本医療研究開発機構「研究開発推進ネットワーク事業」の成果物公開

4.1.RBAの実装に向けた実態調査と必要とされる整備、方策等の提案「治験及び臨床研究におけるQuality by Designの相違調査と求められる体制整備統一方法論の確立」, 分担研究者 (研究代表者: 梅村和夫)

<https://www.amed.go.jp/program/list/16/01/013.html> (最終更新日2023.2.3)

3) 学会委員活動

- ① 日本老年看護学会 査読委員: 演題抄録の査読 3編
- ② 山梨大学看護学会誌 査読委員: 論文の査読 1編
- ③ 第22回山梨大学看護学会学術集会 企画・運営委員

1. 研究課題

高齢者のICTリテラシーと健康習慣に関する研究

2. 研究活動の概要

本研究の目的は、①高齢者におけるICTリテラシーの健康習慣への影響を明らかにすること、②高齢者のICTリテラシーに関連する社会的・心理的要因を解明することにある。そのため、以下の1)と2)の活動を継続して行っている。

1) 先行研究の情報収集

所属学会である日本人間工学会、日本官能評価学会等の学会誌を中心に文献の検索を行うとともに、関連文献を収集している。

2) 杉澤秀博教授との検討

ICTリテラシーに関する先行研究を踏まえ、研究を具体化させるため、杉澤秀博教授と検討を重ねている。

3. 研究業績

【学会発表】

- 1) 松井康祐, 杉澤秀博. 高齢者の健康習慣におけるヘルスリテラシーの効果に関する研究. 日本老年社会科学会第64回大会「老年学における学際的な研究・実践・教育の推進」. 桜美林大学新宿キャンパス. 2022. 7.2-3.

1. 研究課題

在宅介護中高年者の体力や身体機能が介護の負担感に与える影響

2. 研究活動の概要

在宅での主たる介護者は配偶者が多く、老老介護世帯が多い。介護生活を継続していくためには身体的、心理的、社会的な要素が重要といわれている。そこで在宅介護をしている40歳以上の中高年者31名の体力の1指標である体重支持指数が介護負担感と関係があるか調査した。

その結果、セルフケアを介護する時の負担感は、体重支持指数が低いほど増加する傾向がみられた点を修士論文では報告させて頂いた。今後も引き続き調査していく。

3. 研究業績

【その他の研究活動】

- 1) 「介護者のための運動学」、すずらん福祉学院特別講義
- 2) 「高齢社会における理学療法」、高校生向けキャリアガイダンスセミナー講義
- 3) 千葉県富里市介護保険審査会委員
- 4) 救護施設猿田の丘なでしこ救護棟、全盲老人棟の機能訓練相談員
- 5) 初任者研修講習会講師
- 6) 第28回千葉県理学療法学術大会運営学術局担当
- 7) 藤リハビリテーション学院「人間発達学」、「理学療法技術論」、「運動療法」の中で老年学領域の講義担当

1. 研究課題

ケイパビリティ・アプローチの視点から見た現代社会における社会福祉に関する考察

2. 研究活動の概要

イギリスにおける社会的関連ケアのアウトカム指標 (the Adult Social Care Outcomes Toolkit : ASCOT) の日本語訳がホームページ(<https://scrqol-ascot.jp>)に公開されている。ホームページでは、<ケア・支援サービス利用者のQOL>の8領域(後述)と臨床現場で活用可能な「活動ガイド」が紹介されている。さらに<介護者(ケアラー)のQOL>の7領域(①自分の時間、②日常生活のコントロール、③セルフケア、④個々人の安全、⑤社会参加、⑥自分らしくいられる余裕、⑦支援や励ましを受けているという思い)も紹介されている。この指標を活用して、日本でもケイパビリティ・アプローチの理論を具体的に応用する動きがみられる。今後、日本版のASCOTの普及が望まれる。以下、レビューした文献の概要を紹介したい。

長澤による研究では¹⁾、イギリスのケント大学の研究者によって開発されたASCOTについて説明されている。ASCOTは、A.センのケイパビリティ理論に基づき、尊厳や自立支援を目指したケアの介入の効果を科学的に検証しようとする試みである。社会的ケアの用語は様々な文脈において異なる意味で用いられているが、概ね示唆する内容は、長期の状態やニードを持つ全ての対象集団の利用者を対象とした、多元的なセクターによって供給されるケア・サービスであるとされている。

森川らの研究では²⁾、ASCOTの日本語版の開発経過が説明されている。指標は、①日常生活のコントロール、②個人の清潔さと快適さ、③飲食、④個人の安全、⑤社会参加と関与、⑥有意義な活動、⑦居所の清潔さと快適さ、⑧尊厳、の8領域で構成されている。設問項目の日本語訳の語彙上の妥当性については、確保するための工夫が次のようになされていることが示された。例えば、①日常生活のコントロールについては、「あなたは日常生活において自分のことを、どのくらい自分で決められていますか。決めたことを、他の人にやってもらう場合も含めてお答えください」というように、コントロールという言葉を使用せずに質問項目を作成している。⑧尊厳については、「ケアや支援を受けることを、あなたはどのように感じていますか」「ケアや支援のされ方について、あなたはどのように感じていますか」というように、自尊心という表現を使わずに質問項目を作成している。今後、ケアの臨床場面への応用手法などの研究を発展させていくとまとめている。

山口は³⁾、次のような課題の解明を行った。1) 日本語版社会的ケアのQOL尺度(ASCOT Carer)を開発し、実践での活用可能性を示す、2) 実践ツールを開発する、3) ケアラー支援困難性を把握す

る、4) ケアラーとケアが必要な人への支援を両輪とする包括的ケアモデルの論点を整理する。加えて、日本における介護者支援の課題を次のように指摘した⁴⁾。英国の2014年のケア法のように介護者の権利を擁護するために、ケアラーアセスメントを実施し、介護者の孤立や社会的排除を防ぐといった点からの法的保障はされていない。

文献

- 1) 長澤紀美子：施設ケアにおける自立支援のアウトカム評価—イギリスにおけるASCOT指標の意義と課題—。高知県立大学紀要 社会福祉学部編 63. 143-151.2013.
- 2) 森川美絵・中村裕美・森山葉子・白岩健：社会的ケア関連QOL尺度the Adult Social Care Outcomes Toolkit(ASCOT)の日本語翻訳：言語的妥当性の検討。保健医療科学.67(3).313-321. 2018.
- 3) 山口麻衣：ケアラーのQOLに焦点をあてた多面的なケアの質的評価に基づく包括的ケアモデルの構築 科学的研究費助成事業 研究成果報告書.2020.
- 4) 山口麻衣：地域包括支援センターにおける介護者支援の課題—介護者支援の困難性に焦点をあてて。ルーテル学院研究紀要 52.1-12.2018.

1. 研究課題

生活習慣パターンと認知機能との関連：地域在住高齢者を対象として

- (1) 潜在クラス (Latent class analysis) を用いて高齢者の生活習慣パターンと認知機能との横断研究
- (2) 潜在クラス軌跡解析 (Latent class trajectory analysis) を用いて高齢者の生活習慣パターンと認知機能との縦断研究

2. 研究活動の概要

認知機能に関わる要因は多様であり、認知機能低下を促進する要因もあれば、抑制する要因もある。実際の日常生活においては、一人ひとりがプラスに影響する健康行動とマイナスに影響する健康行動を組み合わせた様々な生活習慣を持っており、それらが相互に関係しながら認知機能と関連すると考えられる。

本研究では、「国立長寿医療研究センター・老化に関する長期縦断疫学研究 (National Institute for Longevity Sciences-Longitudinal Study of Aging) の第3次調査から第7次調査 (2002～2012年) に参加者のうち60歳以上のデータを用いており、倫理審査を行って承認された。現在、データを解析することを進めている。

横断研究の結果については、生活習慣に関する10項目の変数を潜在クラスモデルに投入し、生活習慣の組み合わせにより、5つのグループに分けた。それぞれClass 1: 「嗜好品・過眠派」、Class 2: 「運動派」、Class 3: 「インドア派」、Class 4: 「紅茶中心派」、Class 5: 「社交・短眠派」といった名前を付けた。カイ二乗検定の結果、「インドア派」は認知機能障害の割合が最も高く、6.85% (17名) となっていた一方、「社交・短眠派」が3.65% (10名) と、認知機能障害の割合が最も低かった。しかし、これらの群とそれ以外の群との比較カイ二乗検定の結果はいずれも統計学的には有意ではなかった。基本属性や健康状態などの交絡要因を調整したロジスティクス回帰分析の結果、いずれの生活習慣パターンのグループも認知機能との相関関係が有意ではなかった。一方、認知機能との相関関係が有意な関連要因は教育程度であった。すなわち、小学校のみあるいは中学校までなどの教育歴が比較的短い人では、認知機能低下になるリスクは高く、各々7.32倍 (OR = 7.32, 95% CI: 1.37-39.17) および3.44倍 (OR = 3.44, 95% CI: 1.77-6.69) であった。

縦断研究の軌跡解析の結果は3つのグループに分けた。Group 1の軌跡は認知機能正常から軽度認知障害 (MCI) になる傾向を有し、「認知機能障害グループ」と名付けた。Group 2の軌跡は認知機能正

常から認知機能低下になる傾向を示し、「認知機能低下グループ」と名付けた。Group 3の軌跡は普通正常の認知機能状態を維持しているため、「認知機能維持グループ」と名付けた。各調査次（第3～7次）および各クラス（Class 1～Class 5）毎に、「認知機能障害グループ」が最も高頻度であったのは第3次、第4次、第5次および第7次ではClass 4「紅茶中心派」であり、第6次ではClass 3「インドア派」であった。また「認知機能維持グループ」が最も高頻度であったのは第3次、第4次および第7次ではClass 3「インドア派」であり、第5次および第6次ではClass 2「運動派」であった。Class 3の特徴は「インドア派」であり、第一研究（横断研究）とは異なった結果が得られている。

3. 研究業績

【論文】 Original Article

- 1) Kuan-Yu Yueh, Hong-Jer Chang, Hsing-Yi Chang: Cognitive Function and Its Risk Factors in a National Survey of Older Adults in Taiwan: A Latent Class Analysis. *International Journal of Gerontology* 2020; 14(4): 332-337.
- 2) Kuan-Yu Yueh, Hui-Feng Chen, Wen-Jung Chang: The Elderly's Leisure Motivation, Brand Identification and Post-purchase Behavior. *Journal of Sports Research* 2022; 31(2): 17-38.

【学会発表】

- 1) Kuan-Yu Yueh, Chiung-Yun Chang, Wen-Jung Chang, Chi-Ling Kao: Classifications and Applications of Elder Abuse (1990-2022)–Literature Review Using Scopus Database. 2022 International Conference on Hospitality, Tourism and Leisure (ICHTL 2022).
- 2) Kuan-Yu Yueh, Yukiko Nishita, Shiho Fujii, Rei Otsuka², Shuichiro Watanabe, Hong-Jer Chang, Hsing-Yi Chang: Comparison of Factors Associated with Cognitive Function between Older Adult Populations in Japan and Taiwan. 2022 Asia Pacific Regional Conference of Alzheimer's Disease International (ADI-APRC 2022).
- 3) Kuan Yu Yueh, Ting Jung Hsu, Hong Jer Chang: The Characteristics and The Prevalence of Cognitive Impairment and Depression in Elder Abuse. 2022 Asia Pacific Regional Conference of Alzheimer's Disease International (ADI-APRC 2022).
- 4) Ting-Jung Hsu, Kuan-Yu Yueh: Occupational Therapy in Pain Assessment and Management for People with Dementia. 2022 Asia Pacific Regional Conference of Alzheimer's Disease International (ADI-APRC 2022).

【その他の研究活動】

- 1) 老年学における学際的な研究・実践・教育の推進。日本老年社会科学会第64回に参加（2022年7月2日から3日まで）
- 2) JAGS（Japan Gerontological Evaluation Study；日本老年学的評価研究）研究会に参加（毎月一回）

3) SC (Social Capital) 研究会に参加 (毎月一回)

令和4年度 研究活動報告

発行：桜美林大学 老年学総合研究所
〒194-0294
東京都町田市常盤町3758
TEL. 042-797-2661(代)

発行日：令和5年3月31日

編集：(有)片野印刷